

503

146

9 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10<sup>19</sup> 1 2 3 4 5

始





121N-3P

503-146



船尾榮太郎著

歐米新聞界の秘事

及び日本の新聞紙

寄贈

大正  
11.10.18  
寄贈



## 小 引

一 最近我國に於ても新聞紙に關する言議が種々の方面から續出し、而してそれが何れも皆眞摯な議論ばかりである。何となく新聞に對する覺醒時代の曙光が見え出した様な感じもする。社會問題として又文化問題として、今のところ、新聞論ほど大きい問題は無いと私は思ふ。

二 本書は英米獨佛各國の新聞界の秘事、といふよりも、寧しろ主として歐洲大戰から華盛頓會議までの間に起つた斯界の著大なる變遷を説き、之に對する其國國での有力な議論を擧げて最後に著者の日本新聞論の一斑を附け加へたものである。斯様に國別にした譯は、國により國情の違ふ故からでもあるが一は讀者の倦怠を買はざらんがためでもある。通篇重複の事項は力めて避けた積りであるから、讀者が書中の或一國の新聞論を取り其不備の個所を捉らへ、全斑を批評さるゝ如きことあれば



夫も讀者の自由であるが、著者は頗る之を遺憾とするのである。故に讀者に對し切に冀ふところは、本書を首尾一貫の新聞論と見て成るべく第一頁の初めから順を追ひ全篇を通讀せられんことである。

三 私か此様な、いさゝか畠違ひとも見ゆる問題に手を染めるやうになつた理由或は動機として、別段此所に發表する程の大したものゝ有たぬのであるが、一昨年視察のため、歐米を旅行した時の淺からぬ所感が、その動機といへば動機と云ひ得らるるであらう。

四 今年一月某日、或集會の席上、無理やりに演壇に立たせられた時、咄嗟の間不用意ながら、一場の新聞談を試みた。それが圖らず坐に在つた親友高山長幸君や法制局長官横田千之助君、指田義雄君、藤原俊雄君をはじめ、政界實業界の諸君の共鳴するところとなり、其獎勵を受けた事から、本書の起稿を思ひ立ち、爾來業務の餘暇を利用しては、慣れない筆を呵したのであるが、間斷無く起つた諸種の故障から

途中で幾度か挫折せんとしては、自らを勵まし策うちつゝ、やうやくのことで今日脱稿するの運びに立ち至つた。

五 唯だ遺憾の事は、佛蘭西の新聞に對する佛蘭西人の議論を知らんため参考書を巴里へ注文したのが、脱稿迄に間に合はなかつた一事である。止むことを得ず私は行李の底より數十種の佛蘭西新聞を引出し、之を通觀して不十分ながら自己の所見から佛蘭西の新聞論を記述した。のち紹介を得て、在京「ル、タン」の通信員「メーボン」君を訪ひ其示教を受けて益するところが多かつた。尤も佛國の新聞に關しては他の諸國の新聞論中隨所に側面的に種々論述したところがあるから、此點特に讀者の留意を願ひ置く。

六 本書材料の蒐集、その整理、その翻譯をはじめ稿下より印刷校正の終りに至るまで、一切の事毫も他の援助を借らず、悉く自分一人の手で行つた。それが不慣れの事であつたため、測らずも甚しく印刷當事者を惱ませる結果となつたのも遺憾の一



である。茲に本書の成るに當り「メーボン」君と、ともに時々私の質問に答へられた東京の斯界に關係ある二人の友人、および出版について盡力された人人に向つて深謝する。夫と同時に、又本書植字組版の當事者にも特に謝せねばならぬ要あるを思ふのである。

大正十一年七月

著者

引用文献の表示

- 1 Walter Lippmann : Liberty And The News. New York 1920.
- 2 Upton Sinclair : The Brass Check. Pasadena 1920.
- 3 Hilaire Belloc : The Free Press. London 1918.
- 4 F. H. Hayward : } Democracy And The Press. London.
- 5 B. N. Langdon Davies : }
- 5 Kennedy Jones : Fleet Street And Downing Street London 1919.
- 6 G. Binny Dibblee : The Newspaper. Home University Library.
- 7 Arthur Dix : Wirtschaftskrieg und Kriegswirtschaft. Berlin 1920.
- 8 Hermann Diez : Das Zeitungswesen. Leipzig 1919.
- 9 Paul Gentizon : L'Allemagne en République. Paris 1920.
- 10 Margaret Pease : Jean Jaurés. New York 1917.

引用文献の表示



歐米新聞界の秘事

- 11 Viscount Bryce: Modern Democracy (Especially Chapter X The Press in a Democracy) London 1921.
- 12 H. G. Wells: The Salvaging of Civilisation, (Especially Chapter VII. College, Newspaper and Book) London 1921.
- 13 Victor Giraud: La Civilisation Française Paris 1917
- 14 Karl Bücher: Zur Frage der Pressreform. Tübingen 1922.

参 考 書 目

- 15 天野鎮三郎氏著 『泰西新聞論』 明治二十年 東京
- 16 朝倉龜三氏著 『本朝新聞史』 明治四十四年 大阪
- 17 松本君平氏著 『新聞學』 明治三十二年 東京
- 18 小野瀨不二人氏著 『實際新聞學』 大正四年 東京
- 19 楚人冠杉村廣太郎氏著 『最近新聞紙學』 同 東京
- 20 國民新聞社現代叢書 『新聞』 大正五年 東京

其他内外最近の新聞雜誌から引用す



小 總

引 說

目 次

- 一 現代と新聞紙……………二
- 二 新聞紙と文化生活……………六
- 三 民衆政治との交渉……………一三
- 四 經濟問題の脅威……………一六
- 五 新『チャーナリズム』の傾向……………二三

米 國

目 次



目次

一 米國新聞の悖徳と『真鍮の合ひ札』……………三四

二 如何なる目的にて新聞を持つか……………三九

三 新戰國策と『蛇蝎新聞』……………四六

四 『アッソーシエーター、プレス』の天下……………五二

五 新聞の死命を制する廣告……………五八

六 如何に新聞紙を改善するか……………六六

英國

一 政府と新聞との戦ひ……………七八

二 教育條例と新聞紙の民衆化……………八一

三 歐洲大戰と新聞紙の發展……………八四

四 女の世界と無線電信の世界……………九一

獨逸

五 戰時より平和會議の時代まで……………九四

六 『プロバガンダ』の洪水時代……………一〇〇

七 民主々義と新聞紙……………一〇五

八 商品化したる現代新聞……………一〇九

九 匿れたる背後の指揮者……………一一八

一〇 新聞紙とその勢力……………一二三

一 戰時及び革命前の獨逸新聞……………一三四

二 革命當時の新聞紙……………一三八

三 戰時に於ける歐米新聞の態度……………一四〇

四 獨逸新聞界の概観……………一四四

目次



目次

五 販賣法と經濟と廣告 ..... 一五〇

六 記者とその教養——對——社會 ..... 一五七

七 社會心理の要素としての新聞紙 ..... 一六三

八 政治生活及び政治に於ける新聞紙 ..... 一七三

九 實業生活と新聞紙 ..... 一八一

一〇 精神文化との交渉 ..... 一八四

一一 獨逸新聞の將來 ..... 一八八

一二 新しい新聞王スチンネス ..... 一九七

一三 新聞紙の社會化と廣告國營論 ..... 二〇八

佛蘭西

一 歐米斯界の一瞥 ..... 二一六

二 佛蘭西文化の精華 ..... 二二二

三 巴里の新聞紙の々々 ..... 二二九

日本

一 我が國の新聞紙 ..... 二四〇

二 新聞記者と讀者の新聞論 ..... 二四二

三 廣告領域の擴張と變更 ..... 二五三

四 國際的通信機關の諸問題 ..... 二六七

五 日本新聞紙の將來 ..... 二七六

目次



總說



總說



## 一 現代と新聞紙

新聞紙の歴史を説き、其編輯や經營の方法を論ずる如きは此書の目的では無い。又今の新聞の短所弊所を數へ、之に向つて同情の無い非難攻撃を加ふる如きは私の最も好まざるところである。私は本書に於て所謂現代的新聞なるものを議論の對象に置き、刻下主要の文化問題として之を論じ、特にそれが今の政治、外交、財政、經濟、教育及び社會の諸問題との間に有つ關係を考へ、飽くまで眞卒誠實の心を以て、讀者とともに此の大問題の研究を試みんと欲するものである。

世界は廣く、國は多いが、地圖を披けば各國の境界が明瞭に色別けされて、一見之を知ることが出来る。新聞紙は之よりも尙ほ一層明確に其國に住む人民の精神と道徳との圖解を示すものである。従て今日の世界の新聞紙を并べて通觀すれば今の世界の時代精神と其倫理とを知ることが出来る、新聞紙を知るは世界を知ることである。

新聞の創業時代は何れの國でも皆營利を目的としたものであつた。中ごろ新聞の勢力が大に加はつた結果、それが政治意見の發表機關となり、政治爭議の要具として用ひられた。昔ハインネは言つた『今の時は、我等は思想のために戦ひ、而して新聞は我等の城砦である』と斯くの如く新聞は又思想の戦ひの機關でもあつた。

新聞紙は自由を憧憬する戦士と協力し、壓制政治といふ其強敵を打仆した。其結果として文明諸國に於て汎く言論の自由が獲得され、新聞紙の威力は愈よ加つた。間もなく勝利者の悲哀は彼等を襲ひ、新聞は再び元の營利事業に立歸つた。而して必要に驅られて從來よりも遙に大仕掛けの營利事業たるに至つた。

新聞紙が現代生活に如何に緊密な關係を有して居るかといふことは茲に之を絮説する必要無しと思ふ。凡そ人類過去の歴史は皆多くの教訓を含み我等の生活に深い關係を有つ。然し新聞は我等の生きて居る今日一日の歴史である。従て過去と過去の記憶よりも我等の今の生活により深き關係を有ち、より大なる興味を與ふるものである。



故に現代人の多数は毎朝白紙のやうな新しい頭脳で新聞紙を觀、それから若干の影響、刺戟、興味、の何ものかを受けねばならぬ又之を好んで受くるものである。切言すれば我等は意識的又は無意識的に新聞から感化、教育少くとも之に類似した或る何物かを受くること無しに、生活し得られない時代に在るのである。

新聞紙の經營者は其營利主義の立場から新聞を興味中心のものに變じさせた。國民の大問題は常に必ず眞面目な事件である、然し眞面目の事件は必ずしも面白い事件では無い。興味ある面白い事件とは多くは珍らしい事件を指して云ふのである。従つて最も新しい事實必ずしも善い新聞種で無く、唯意外な珍しい事が最上の新聞種である。例せば身分ある妙齡の令嬢が通學の途中電車に乗らんとして其電車に轢かれて死んだといふ事件に向つて之を單なる災厄として見、群衆の爲めに押し出されて軌道の上に墜ちたと記載するよりも、裏面に伏在する深い何かの事情が彼女をして白晝而かも衆人環視の前に女としての優しい羞恥の感念をも喪失させ自殺させるに至つたと報

道する方が其興味の價値が遙に多い。新聞が迅速と興味とを重んずる餘り、屢々事の真相を究明するを怠るといふ實際の事實を、讀者が其經驗から十分に知つて居る。故に讀者の中には、時に憤激の餘り一般の新聞を一括して、今の新聞は唯だ皮相を好む人々に、世上輕薄の事件市井の瑣事を輕薄なる筆致で報道するもので畢竟有識者の見るべきものでないと斷ずる者をも生ずるに至つた。

心の教練のために今の新聞を讀まんとするならば、それは儘に大なる誤謬である。而して又頭腦の教練のためには、新聞は却つて甚大の害を人に與ふるものである。其證據には新聞紙は十分間に平均四五十の異なつた事件に就て考へるものであるから、人の頭腦を毒する之より大なるものは無い。これらは一方の觀方である。

私は思ふ、今の人の新聞を愛好する心理は活動寫眞を愛好する心理と同一である。活動寫眞は何處までも觀客の興味を中心とした、珍奇な事物や事件の感傷的な推移と共に其場面の迅速なる變化を理想とする。普通の劇や小説は之を見る人々に最初から



其想像的作爲的のものであることの暗示若くは豫想を與へる、活動寫眞は之に反し多く其背景を自然に依頼し且つ人物の活動を自由ならしむる爲め、觀衆は時々眞の事實と創造された事柄との區別を爲す判斷力を喪失する。是等の點に於て今の新聞は活動寫眞に酷似する。

我等は完全を新聞紙に求むる心から時代の傾向や好尚を無視して徒らに新聞を攻撃するの愚に倣ふてはならぬ。然し近來異つた種々の根據から新聞を攻撃する者が續出して來た。之は決して日本のみの事で無い、今や世界を通じて新聞の現状及び特に其新たに趁ひ行かんとする新傾向に對し痛烈なる論難攻撃が始まつて居るのである。

## 二 新聞紙と文化生活

我國の一例として茲に本年一月の雜誌『文化生活』に現れた有島武郎氏の『生活よりジャーナリズムを排せよ』の所論の概要を摘録し之に私の卑見を加へてみる、

『事實が正確に報道されないで、事實の影ともいふべき聞き書きの類が頻りに流布される。世界的事件から巷間の出來事に至るまで。事實の真相が極めて曖昧に葬られてしまつて、それにまつはる第三者の揣摩膨脹が、形容澤山な表現によつて刺戟的に羅列されてゐるのを見る。若し一人の人が本當に自分に忠實な生活をしようと思へば、他のことなど考へてゐる暇はない筈だ。これは一見餘りに自己本位ないひ分のやうに思はれるかも知れないが、而して確かに一面にはさうした危険を伴ふかも知れないが自分といふものに忠實でない人が、假りにも他人に忠實であり得やう筈が無いではないか。而して自分の生を本當に考へ、自分の生活を自分自身の所有を以て確實に築き上げようとしゐる人程、他人のこと他の事件に對し、必要もない興味を向け見當違ひな批判を下して喜んでゐる、夫れは正しく、家の内にして置かねばならぬ用事の多くを實際は有ちながら、洗濯盥と汚れ物とを持つて井戸ばたに集るお内儀さん達の井戸端會議の心理である。人々は自分の生活の内容の空虚さに倦き果てゝゐる。而してせ



めては他人の噂さによつてでもその空虚を満たさうとしてゐるのだ』

『斯かる傾向の押しつまつた所には何が起るだらう。一つの極端にはこの傾向は、要もない英雄崇拜、偶像崇拜の悪風を作り、他の極端には無内容な偽善的傍觀主義を醸すに至るのだ。例へば人間のよい事件が勃發し、これに對する種々な空想的な噂さが流布すれば、その事件を生み出した人間は忽ちに彼が固有する以外若くは以上の色彩を以て塗りまくられる。而して自分の生活を固有しない人々は無批判にもその手品のな色に眩惑されて、ひたすらに其人間を崇拜し憧憬する。かくの如くしてカイゼルに行きウキルソンに行き、ロイドヂョウヂに行く。而してそれらの人間の本質が或る時期に其の経過と共に現はれ出ると、忽ちそれらの人間が今まで人々を欺いてゐたかやうに自分勝手に幻滅の悲哀を感じ始める。何といふ不徹底な英雄崇拜ではある。』

『自分の研究に没頭した餘り日露戦争が始まつたのも、終つたのも知らずに過した學者が日本にあつたと私は聞いて居る。人々は之を腐儒の輩といつて笑ふかも知れぬ、

然し、私は人々の生活にかくばかり「ヂョーナリズム」が跋扈する現在にあつては、かゝる人の生活を尊いと感ぜずには居られない。』

『生活より呪ふべき「ヂョーナリズム」を排せよ。』

此の有島氏の意見は慥に一面今日の新聞の弊所に中つた議論である。然し人が徹底的に自己に忠實であれば、彼れは他人に對し十分忠實であり得る餘裕を有ち得ぬ。之は氏も亦言明して居るところである。眞に飽く迄も自分に忠實で、同時に他人に對しても同一程度に忠實であることは夫れは或る限られた人々の能くするところで平凡人の實行し難きところである。而して又現代の文化生活を慾求する人々が其の生活から「ヂャーナリズム」を排することは、それは或意味での至人のみの能くするところで大多數の現代人の容易に否な到底實行し得ないところである。

其所で私は今文化生活とは何ぞやといふ問題に移り極めて簡單に之に就て一言を試みる。先づ順序として文化なる語の意義を明かにして置かねばならぬ。



文化なる語に就ては我等國民の中に未だ明確な概念が出来て居無い、明瞭なる定義が與へられて居ない。若し夫が從來文明開化と譯されて居た *Civilisation* に對する新しい譯語であるとするれば、それは野蠻からの開拓、と藝術と優雅の教養を意味する、之は英語の意味で、佛語の方には人間の社交的で風儀の上品な状態をも意味する。若し英佛の *Culture* 或は獨逸の *Kultur* の語の翻譯であるとするれば其意義が一層複雑になる。此語の起りは農耕、栽培、飼育、人間の教養、人の修養から進んで其の結果たる人の上品優雅の品性と其状態を指す、故に以上を一丸とすれば略ぼ其概念を得らるる或は *Civilisation* を物質的文化とし *Kultur* を精神的文化とする説もあるが、夫は或一部の思想家の獨斷的用語で兩語の間其様な明確な區別は無いのである。畢竟何れにしても狹義の文化生活は自己修養である、之は集團文化に對し其一分子たる單個文化とも名け得らるるが、然し自己の人格に生くるといふことが、心の命するまゝ意の動くまゝに行動することであるならば其處に放縱自恣の生活と稱せらるべきものが期待

される。若し文化生活は専ら自己の修養に努め其れを根基とした生活だといふならば其處には其修養の基準又は理想として或る超人若くは或る人格を選ぶ必要が起り來らぬであらうか。何となれば人は「神」を除けば、高尚なる人格より他に尊いもの存在を想像し得ぬからである。是に至れば氏の指摘した「空虚な生活をして居る極端が陥る」といふ『英雄崇拜』『偶像崇拜』が却て斯かる文化生活の上に現はれ來ることはなきか、或は然らずんば徹底的自己忠實主義の名の下に氏のいふ「無内容な偽善的傍觀主義」此の場合には孤立的獨善主義に陥るの嫌は無いが、私は疑問を有つ。

又有島氏の同志等が能く用ゐる文化運動の語は、抑も何を意味するのであるか、未だ聞くことを得ぬが、若し其の文化生活なるものが飽くまでも自己の人格にのみ生くる生活であるならば、其運動の目標としては其同志を増加し之を糾合する外、外部に向て戦ふ目的物が何處に有るか、往年歐羅巴に起つた文化闘争には大なる目標があつたでは無いか。若し夫れが國民同胞の無智蒙昧を啓くにありといふならば天下の大衆



は悉く諸君の味方であらねばならぬ。何となれば無智蒙昧に固着し之を愛好する者は世に一人も無いからである。要するに獨善的、孤立的、消極的、貴族的傾向ある文化生活は今日世界の人々が其目標とし進み行かんとする集團文化の精神とは全然相容れないものであると私は思ふ。

現代に生きて居る人の中には眞に目醒めて、自己の生活の内容の寔に空虚であることを知り、之を嘆き悲む人々がある。實際それが青年、學者又は所謂有閑階級レイジユア、クラッセに屬する人々の中に割合に多い事を我等は知つて居る。然しながら我等は又一方には日夜寸時の餘裕も與へられず生活の戦に忙殺され、其様な精神的問題を念頭に置く餘暇の無い大多數の人々のあることを記憶せねばならぬ。彼等に取ては反省などは寧ろ閑問題で、其活路は唯だ進前である、物に追はるゝ進前と事に追はるゝ活動即ち彼等の生活である。従て彼等は自己を圍繞する自己と同じ種類の人々が、今といふ現在に如何に生活しつゝあるか、而して今自分等の活動しつゝある此の世界が瞬時の休みも無く、

如何に活動し、如何に進轉しつゝあるかを見、自分も其活動の一分子たることを臆るげに自覺しながら、是等の状態を報道する新聞を讀んで多大の興味を覺えつゝあるものである。斯の如き人々に取ては其生活より新聞紙を排除する如きは殆んど其生命を奪はるゝと同一で、實際に於て不可能の事であるのである。

斯様な種々の事實に基いて新聞は次第に民衆化するに至り、民衆は益新聞紙に接近して行き、知らず識らず民衆自らが新聞に同化されるまでになつて來た。故に此種の人々等は必ず言ふであらう。『生活より「チャーナリズム」を排斥せよとか、誰れが果して實行し居るか、戲言にも程こそあれ、それは畢竟閑人の嚙語であらねばならぬ』と。彼等にとつては新聞に接近して居ることが即ち其生活の意義ある部分であり、従て新聞を排除し之と交渉を絶つ如き世界は到底彼等の想像し得ざるところである。

### 三 民衆政治との交渉



ヂエイムス、プライスは其世界的名著「モダン、デモクラシー」中民衆政治の定義を下して斯う言つた「人民全體の意志が實行せらるゝ所即ち民衆政治と名け得らる」と。これに就て斯ういふ問題が起つて來る。一國に於て其人民全體の意志なるものが如何にして觀取し得らるゝか。如何なる方法に依て最も確實に、迅速に且つ普遍的に人民全體の意志なるものが察知し得らるゝか、之は實に至難の問題である。唯此の場合今日の新聞が此目的に向て現存する機關の中最も有力なるものの一である事だけは甚だ明瞭である。

集團文化を目的とし生命とする民衆政治に取つては新聞は其法典であり聖典であらねばならぬ。之は理想である、事實は如何。「民衆政治は政治組織の正則的自然的形狀としては一般に承認されて居るが、其結果はまだ試験中にある」とプライスも云つた。現代の新聞紙に至つてはそれが先づ正則的自然的形狀として果して承認さるべき状態に在るか否かに就てさへ其處に多大の疑問がある。

新聞紙が民衆政治の聖典として正しい事を書き眞實を報道するのが其目的であつても、同一の事件に就て之が甲と乙と人によりて觀察と判断の仕方が違ひ、其表現の仕方が違ふのも實際に於て免れ得ざる事柄である。且つ近來斯業は非常に發展して、新聞の素材は必ずしも記者や探訪者の自ら蒐集するもので無く、國內は云ふに及ばず、世界の各方面の機關から、來集するところの新聞材料は餘りに多く、記者は其何れを探り何れを捨つべきかに惑ふのは眞實である。夫れらの素材のうちには虚構あり、宣傳あり、憶測あり、事實あり、希望あり、恐嚇あり、中には新聞所有主の希望により創造さるゝものも混入する。従て之を選択し判断し、整理し潤色し、適當に讀者の眼に示すところの記者の責任は重きが上にも重い。彼は眞に明敏達識の人でなければならぬ。彼は至高至平八面玲瓏の人格者でなければならぬ。彼は實に民衆政治の聖者で無ければならぬ。之が近代の理想的記者として世人の要求するところである。

然るに現代時勢の風潮は其民衆政治の聖者たるべき記者も、其居るところの地位其



ものの大なる變化に依て此の要求に背き又自己の理想も全然裏切らるゝ事實を生じた

#### 四 經濟問題の脅威

實際に於いて歐米でも新聞紙が政治的社會的に絶大の勢力を揮ひ記者が「無冠の帝王」たる事實を示した時代は、我が明治二十年にならぬ先に既に其の終末を告げたのである。是が原因としては社會の變化、其他種々の事柄を數へ得るであらうが、其中最も有力なる要素となつたものは新聞事業其ものゝ經濟的關係に外ならぬ。

今の新聞を讀む者は、夫から娛樂實益教訓及び職業上の利益を併せ獲ねばならぬ、之は需要者の求むるところである。新聞業者の方から云へば紙價は日に高く、人間の給料益不廉で然かも同業者の競争は激甚である。故に新しい新聞の創業勿論至難であるが、古い新聞亦經營甚だ困難である。一例を舉れば、頁數の多い米國の新聞紙は、大抵原價の十分の一で賣る、之は實に大なる犠牲である、然かも夫れで如何にか會計

の辻褄を合はせてゆくののである。即ち其の十分の九の損夫は、何で補充され行くかと言へば、夫は高い物を安い價で賣つた返へしとして讀者の方から新聞の方へ戻して呉れるもので補ふ。それは即ち廣告料である。新聞の提供者たる當業者が、社會に向て報償として求むるところのものは、實に此の廣告料である。

大戰前の計算であるが歐米の文明國が一般に廣告に費す金額は一年無慮六億磅、而して少くも此半額は新聞雜誌の廣告料で、又其最大部分が新聞社の収入となるものである。之を細別すると、新聞雜誌の廣告料のみで、英國が五千萬磅、大陸諸國を合はせたものが同じく五千萬磅、米國は歐洲全體の略ぼ二倍であつた。尤も戦後の今日、實際は以上の數字に幾倍するものであらうとは専門家の一致した觀察である。戦後は別として、戦前に於て或る一國では其の國の新聞の廣告料が、其國の歳計總額よりも巨額であつた實例から見ても、廣告が如何に偉大なる勢力を世間にも又新聞界にも有つて居るかが判る。而して現在及將來に於て、其の偉大さは益々増大するとも、決し



て減退する理屈が無い。

昔は商品は多く困難を以て生産され、飢ゑたる市場は只管にその出現を俟つたものである。然し今日は全く其の正反對で、現下實業界の最大問題は、生産の在荷過多を防ぐべく、如何にせば迅速に品物を賣却し得るかといふことである。具體的の一例を挙げれば。米國自動車の生産高は一九一九年の統計に據ると、一分間十一臺以上である、生産品の繼續的安價を保持せんためには、此の生産率を何處までも支持するのみならず之を増加する事すら努めねばならぬ。而して斯くして生ずる其の生産過剰高は猶豫なく間斷なく市場で商はれ消化されねばならぬ。斯の如き大産出力に對し假令一ヶ月間でも其の販賣力を失ふならば製産者は大半破産せねばならぬ。之は米國の例であるが、現今東西を通じ何れの國でも各種の製造業は總て此例に洩れず、悉く之と同一状態の下に在るのである、而して之が當面の救濟となるものは何物でもない實に廣告であるのである。

斯の如く生産品の安價を期するため、物品を大量に製出せねばならぬこと、之が當然の結果たる在荷堆積より生ずる價格低下を防ぐため、一時に餘り多くを市場に送り出すことの出来ないことは近代に於ける産業上の一大『パラドックス』である。而して之を實際に解決するものは廣告である。需要は決して飽き足らしてはならぬ。少くとも産出力を賣れ高に等しい位にするか、或は夫れよりも較や多くして、常に確實なる吸収力を保ち行かせねばならぬ、即ち需要を永久に刺戟して行かねばならぬ。此の需要を永久に刺戟し得る最も有效なる又殆んど一般的なる方法は實に廣告其ものに外ならぬのである。

今や新聞は小資本では全然經營が出来なくなり、而して新聞事業其物も、竟に資本主義でなければ成立して行かなくなつた。其上斯業を養つて行くものは又大量生産と之に適應する販賣法とを以て生命とする資本主義に外ならずとすれば、新聞論は勢い資本主義の議論とならねばならぬ、然し是れは本論の目的ではない。



近年歐米でも新聞事業は中々儲かつた、誰れも彼れも新聞に關係した時代があつた。彼等は勢に乗じて其の規模を擴げ、門戸を大きくした。其の結果次第に経費が嵩み、大利益が大損失かを賭する一か八かの事業となつた、若し損失となれば甚だ急激で且つ重大で一年十萬磅位の損は通例である。斯ういふ場合に瀕すれば堂々たる大新聞も廣告主の機嫌を損ずることは夢にも出来ぬ。記者が書かんとし、發表せんと欲する事項も、新聞社の會計が許さなくなる。彼等は自己の意志が行はれないのみならず、屢ば自己の意志に反した事をも敢てせねばならなくなる。例せば下らぬ賣藥殊に其の商人どもが貧乏人の懷中を狙ひ、彼等を頭から胡魔化さんとする卑劣なる其行爲には、衷心から反對したくなるのであるが、新聞社の事業上の立場からすると、表面にも裏面にもそれが出来ない。そこで毒を買はせない迄も之に對し不即不離の態度を取るべく餘義なくさせらるるのである。

廣告が新聞の財源であり、金穴である事實から、次第に廣告を出す實業家が新聞の

上に勢力を有つやうになつた。例之は大廣告主となると、資本主義を傷くるところの新聞には、廣告を出さぬといふ一種の制裁を案出した。夫れが最近になると、更に一步を進めて、廣告主は現實的に主義プリンシプルや説オピニオンを新聞に指示し得るやうになつた。加ふるに彼等は、今一つ他の有力な新規なる武器が、自分らの手中にあることを發見するに至つた、夫れは新聞の抑壓サップレッションである。

斯様にして新聞を所有する資本主義と、廣告を出す資本主義との間に、利害が一致した末、終に兩者の間に甲乙無く、明確なる差別が無くなつた。之は外面の現はれで内面に於ても資本家新聞が代表する勞力は、大廣告主の代表する夫れと全然同一のものあるに至つた。一例を擧ぐれば『デイリー、ニウス』を所有する同一人が、『デョーングズ』石鹼や『スミス』丸藥の大株主である如きである。斯かる事業には斷じて相互利害の衝突のありやうが無い。

斯く言へばとて、近代新聞紙に大變化を來たらしめたものは、一に廣告の勢力であ



ると斷言することの出來ぬ事實がある。元來新聞紙は公衆の面前において、政治家でも、將軍でも、實業家でも、藝術家でも、之を成功と榮譽の絶頂に置き得る一方、又如何なる權勢家でも、社會の公僕を以て任ずる君子人でも或は一個無名の匹夫匹婦でも、等しく之を傷け、之を失望の淵に沈めることが出来る。之れが記者の良心と其正義の觀念とに根ざす以上、新聞紙の使命又其の社會の公器たる所以であるとも言ひ得られる。従て新聞は自己の恩人であり自己に君臨するところの廣告其物に對しても、其の不正不善のものに對しては大なる威力を示すべき筈であり、又示すことを要するのである。如何に廣告が新聞の背骨であるからと言つて、新聞が新聞としての良心の存在を疑はるるまで廣告に媚びれば、其の新聞は漸次讀者の上に有する把握を失ひ、聲價を墮し、發行部數を減じ、竟に其の威力の本源及び成立をも失ふ事になる。故に新聞が廣告に制せらるるといふことも、理論上或る限度以内の事であらねばならぬ。

## 五 新「ジャーナリズム」の傾向

茲に至つて、私は順序として英國新聞界の現状について、極めて簡単に述べ置く必要あるを思ふ。何となれば英國は今も世界金融界の中心である如く、又依然世界新聞界の中心である。英國「ジャーナリズム」の風潮は英國の社會の遲鈍な然し堅實な進歩に連れ或は夫れに先んじて進んで行つたのである、而して世界の新聞はその煽情的な、軽い方面は米國を學んで來たが、その精神は何處迄も英國を仰望し、之を模範として來た。或は將來も左様であらう。而して殊に英國新聞の事歴は、頗る日本の新聞に影響するところが多いからである。

英國の新聞界も長い間に幾變遷を経て來たものである、其の間に度々社會が行詰つた如く新聞界もまた度々行詰つた、而して行き詰つては常に新しい境地を開拓し來つて今日に至つたのである。其跡を考へて見ると、約二十五年か三十年目に、必ず一變



遷があつたやうである。今回の大戦は別とし、最後の大變化は『英國』の章で較や委しく述ぶる積りであるが、彼の一八七〇年に教育條例が實施されてから後の社會の變り方である。之を爛眼なるアルフレッド、ハームスウオース即ち今日のノースクリツフ卿が、此れが當然の結果として大多數の新しい讀書公衆が出来た事を發見して、案出した斯道の大改革である。彼の所見では、今の人々は昔のやうな調子の高い、而して乾燥無味な、グイクトーリア時代の新聞紙が其の顧客に提供した如き獻立とは、全然異つた或物を要求すると云ふのであつた。是故に世人は彼を新聞の調子を墮落させ、之を下品なものにした張本人として貶し、或は自由職業を商賣化し、その眞面目さと其の聰明的品性とを打ち毀はした發頭人として彼を責めるのであるが、之は何程かまでは眞理である。然し公平に言へば、彼れの新「チャーナリズム」は舊來の鈍重と頑愚の澤山を打拂つたことは争ひ難き事實である。而して一般労働者にでも讀める平易な新聞を、安價に世に提供することの出来るやうにした功績は慥に彼に歸すべきであ

る。彼が成功するのを見て、他の同業者らも自衛上彼と彼の「デイリー、メール」とに倣つて之に跟着行つた。爾來數年に跨がる競争搏撃の後、大部分の英國新聞紙の調子は次第に從來の眞面目と莊重の態度とを減少するに至つたのである。

新「チャーナリズム」は、斯業の上に二個の新現象を造り出した。一は新聞事業の獨占に傾いて來たこと、他は其の經營に、巨額の費用を要する様になつたことである。此の獨占の事に就ては別項に於て詳論するが、經營の點に就て言へば、「デイリー、メール」風の近代的平易な日刊新聞は、多數發行即ち多數生産主義に於てのみ成功するといふほど、新聞の生産に巨大の費用を要する様になつて來た。多數を賣らねば新聞は成立たず、一旦成立すれば容易に倒れないが新しい日刊新聞を起すには、餘りに巨額の金が要る、而かも大なる「リスク」を踏まねばならぬ。斯様にして最早新しい新聞は、新たに成立し得ないといふ玄人間の合ひ言葉も、容易に首肯される次第であるが、然し之は其人達の信ずるだけのことで、商賣の常道から言へば、世に團結のある



所に競争起るべきは、猶ほ競争の烈しき所に團結の生ずるが如きものであるから他日必ず現代の新聞制を打破する新しい道が開けて來ることと信ずる。

新しい新聞道の起るのは、十分の理由を以て期待し得られることであるが、唯之に對する否定的現象が一つある。夫れは今日の人々は、一時代前に新聞及び新聞記者に對して抱いてゐた半分の心酔をも、彼等に對して懐いて居ないことである。少くとも新聞が以前よりも頗る重んぜられなくなつたのは争ふ餘地の無い事實である。昔は新聞の諷刺、暗示、煽動に依つて、破壊をも建設をも行つた公衆は、現代新聞の記事や論説では、其の神経を微動させる事はあつても、手足を動かす者は無くなつた。恐るべき變化である。蓋し此れは當然の變化であるとも云ひ得られよう。何にしても之を舊に復することは容易の業でない。之を要するに、新「ジャーナリズム」の陥るところの傾向は。

一、多數の新聞は極めて少數の富人の手に落つる。而して殆んど常に公平に評して

頗る人格的價値の少い人々の所有に歸する。

二、一たび彼等の手に這入れば、直ちに只の商賣的企業にして了ふ。

三、廣告に依つてのみ經濟的に支持されるから、廣告主は少くとも新聞の一部を統御し得るといふ、當然の結果を來らした。

既に是等の廣告主なるものは、新聞の所有者と其の動機に於ても經營法に就ても同一なる資本家の部類に屬するが故に、彼等の權力は毫も所有主の權力と扞格するところがない。然し廣告が新聞を成立たせるといふ事實から、何人も大資本家の廣告主が非とする如き記事や論説を公にすることが出來ないやうになつた。否な新聞を左様になして了つたのである。

政治關係や實業の利害を代表する者は別として、所謂、不偏不黨の獨立新聞なるものに、經濟的立礎の可能は容易に期待し得られなくなつた。其主なる理由は、即ち公衆は永い昔から新聞の値段は五錢に値するものに對しても、二錢を期待するやうに教

新「ジャーナリズム」の傾向



へられ、習慣附けられた。而して其の三錢の差は、廣告の補助に依つて支拂はれ居る事實を了解して居ない。假令了解しても、了解しない振りをする。故に善良な、公平な、優美な、正確な、理想的新聞が出来ても、正直な値段では賣れない。賣れないものは早晩倒れるより外、途は無いのである。夫れで新聞は自ら其品位を墮して、只管に公衆に媚び、賣れ高を増加して、其苦境を切抜ける可く努力する。斯の如き新聞に社會の耳目、社會の木鐸たる責任を負はすことは出来ぬ、寧ろ其負はさんとする方到大いなる無理があると謂はねばならぬ。斯くの如くにして一般に重んぜられなくなつた今の新聞に、最近一の重大なる新現象が現はれて來た。

夫れは國家の政治機關の中に新聞が侵入して行き、國家の官吏に優る眞の支配權を揮ふに至つたことである。而して新聞は國の卿相（ミスター）を任命し、之を罷免し、之に政策を強要し、終には主權をさへ干さんとするものあるに至り、而して總て是等の事柄を秘密に、且つ頗る無責任に行ふのである。此れが現代の主なる政治的事件として、今日

英國に見る特殊なる時代徴候である。其斯くまでに甚しきに至らしめた直接の原因は何であるか、夫れは即ち這回の大戦であつた。人々は突然に起つた恐ろしい大戦争の最中に、この事實を知つて、眞に仰天したのであつた。此れは實に二三年前までは、何人も夢想さへもしなかつた事柄である、といふのは、英國の首相は人民の投票に因るのでもなく、又明白な權威の或る他の形式に因るのでもなく、唯だ新聞紙の一團の持主たるだけの輩に依つて立てられ又廢されるといふ、不可思議な恐ろしい事件が發生した。此の様な事は誰れが果して事前に豫想し得た所であらう。現今に於ては如何に非凡な首相でも、新聞の持主が好意を有つことの確かめられぬうちは、如何なる政策をも實行することが出来ぬ。否なそれを企畫することすらなし得ない。先づ彼等の意に諮ることなくしては、如何なる法律案も議會に提出することが出来ない。否多くは直接彼によりて巨細に注文されるのである。英國の一論客は言つた。『眞のところ吾人は今日職業的政治家に由つてでなく、又金錢を彼等に出す人々に由つてもなく、唯



何人でもあれ新聞『トラスト』の持主といふだけの最も無遠慮な、最も野心深い者共によつて支配されて居るのである』と。

此無遠慮な野心深い新聞トラストの持主たる者は、自己の力量によるにあらず、自己の人格によるにあらず、唯其背後に巨大なる讀者團なるものを控へて居るといふ唯一の理由によつて、自分から頗る偉い者となり濟まし、或國では屢ば其の首相を強要して自己の説を實行せしめ、他の或國では其の大統領を勝手に取り代へ、甚しきは國民を驅つて戦争の渦中に投せしめ、多數人民の不幸を他所に、自己の虚榮に憧憬し自己の私利を逞うするものを生ずるに至つた。然し私はそれらの無道を敢てする其個々の人格を憎みたくない。又それを代表する個々の新聞を憎みたくない。唯だ現代の新聞紙が種々悪用されて居るところの其状態を其傾向とを惡むのである。『爾曹のうち罪なき者まづ彼を石にて撃つべし』私は今新聞の讀者たる以外、所謂『チャーナリズム』の事に何等の關係無き故を以て、自ら進んで此罪なき者となり、特に歐米に於ける新

聞の今日の状態、今日の傾向其ものに對し、聊か海を隔て、遠方の憾はあるが、石を取り力をこめて之を彼等に投げつけたく思ふものである。

從て思ふ、倫敦橋下の水は日本橋下の水に通ずといふは稍や古い語ではあるがそれは眞理である。現代時勢の潮流の脚は、まだもつと早い速力で推し寄せる。巴里から流行つて來たといふ兩耳を蓋ふ女の髪結び振りは、既に二三年前から日本の若い女をして之に倣はしめた。先年から倫敦を風靡して居た『オールド、ローズ』色は近頃東京の娘の肩掛の色を獨占する様になつた、歐米の事情は應て日本の事情であらねばならぬ。上來述べ來つた英國新聞界のことも、決してそれが何時までも日本に於て、場合でないと言れが大膽に斷言し得よう。



米  
國

# 米 國



## 一 米國新聞の悖德と「眞鍮の合ひ札」

海には海の幸、山には山の幸饒かに、地球上最も多く自然に恵まれた米國加州の南部、ローサンゲレス市の近くにバサチナの町がある。此處は美しい家と庭、森と百花と坦路との街である、地上の樂園たる要素が悉く備はつて居る清い静かな田園都市で米國百萬長者の大別莊地である。

今此のバサチナの町にアプトン、シンクレアといふ從來幾部かの小説を書いた一文士が住んで居る。彼は一昨年春、自己の手で一の書籍を出版した、書名は「眞鍮の合ひ札」、一名「米國チャナリズムの研究」といふのである、其の内容は思ひ切つて米國新聞の腐敗墮落の澤山な實例を暴露したものである。此書が世に出ると現に今猛威を逞うして居る米國「新聞トラスト」の大なる怒りに出會ひ、社會主義の新聞雜誌の外、全國の新聞雜誌といふ新聞雜誌が一致して此書に就て一言の批評もしなければ

一行の紹介もせず、且つ其の紙上に廣告を出すことすら全然拒絶する。

尙剩さへ此書の印刷を妨ぐるため、製紙業者は申合はして彼に紙を賣ることを禁じた。彼は止むことを得ず、齋色した商品の包み紙を多量に買込み、内容に相應しい在來の型を破つた面白い本を刷出するに至つた。其今日までに賣上げた冊數は、二十萬以上と稱せられて居る。彼は新聞記者出身であるから米國各州各地の新聞の弱點は、頗る多く其手に握つて居る。大體の書き振りは稍や偏した嫌はあるが、全國の新聞雜誌や、各廣告主が、手を代へ品を代へて種々の迫害を加ふるにも拘らず、斯く迄多くの賣れ行きあるところから見れば此書の言ふ所必ず若干の眞理がなければならぬ。以下要點を撮んで此書の説く所を紹介して見る。(昨年讀賣新聞の千葉雄氏は東方時論に、又小松(こまが)ある。)  
(綠氏は中外商業新報に、此書の梗概を紹介された。)

米國を以て自由の樂土と呼び、民衆政治の郷土なるが如く人も吾も思ふたのは、それは昔の事である。此國は今現に實業の帝國であるのである。資本主義の權化たる實



業の帝國は、社會の耳目たる新聞といふ新聞の殆んど全部を其脚下に踏まへ、頗る思切つた『チャーナリズム』の統御を行つて居る。其の方法は大略四つある。(一)新聞の所有、(二)新聞の持主の所有、(三)廣告を以ての補助、(四)直接の贈賄である。概観すれば米國各州の新聞雑誌の所有は、各地方の主産物に關係ある産業の經營者の手中にある。例之はミシガン半島は銅業者、モンタナ、アリゾナの大部分も之に同じく、コロラドは石炭業者、西ペンシルバニアとイリノイは銅鐵業者、ウイスコンシンとオレゴン州はウオシントン木材業者、ノースダコタとミネソタは製粉業者で、其の背後に鐵道と銀行がある。中央カリフォルニアはSP及エーナイテッド、レールウエーが立つて居る。殊に後者の如きは、桑港で自ら週刊新聞を發行して居る。

桑港では『カーキンズ、シンデゲート』が週刊新聞を初めに手に入れ、次に日刊の小新聞から、今日は『サンセット、マガジン』『サクラメント、ユーニオン』『フレズノ、ヘラルド』を併せ更に『サンフランシスコ、グロウプ』を創刊した。其金主の何

人たるかは殆んど知る者がない。尙ほ此地では『エキザミナー』と『コール』とが有名なハーストの新聞で、『ブレチン』、『クロニクル』の二新聞も、夫々或る人々の目的ある所有物である。南の方サンデゴには砂糖王の所有する二新聞あり、『ローサンデレス』の新聞に就ては別に詳論すべく、太平洋岸を北に上つてポラトンドには『テングラム』あり、之は材木王の息子二人が經營して居る。シアトルに『タイムス』あり、之れはヒルの關係と大北鐵道會社の補助を受けて、非常な大財産を造り上げた。其成功は米國企業界の隨一であらうといふのは、現今六百萬弗の資本に對し、五分の配當をして居るのでも分る。『スター』はスクリップスの新聞で『ポスト、インテリゲン』は定評あるフハースなる者がヒルと大北鐵道會社から譲り受けた新聞であるが、今は借金のため銀行の抵當となり、其銀行の勢力下にあるとの事である。

詳しく此様な實例を擧ぐるは非常に煩しく、餘りに面白くもない事であるから、成るべく省略して、米國文化の淵源地又その中心地ともいふべき、ボストンの一例を示

米國新聞の粹徳と「眞餘の合ひ札」



すに止めて置く。『ポストン、アメリカン』はハーストの所有『デーリー、アドヴァタイザー』は、此市の最古の新聞であるが、矢張り同人の掌中に歸して居る。『ポストン、グロウプ』は其夕刊とともに、『スタンダード』石油會社が統御し、『ヘラルド』と其の夕刊『ツラヴェラー』は、前上院議員クレーンと或る製靴會社の所有である。『ポスト』も今はクレーンの傘下にある。

大抵の市には、地方の大『トラスト』の所有にかゝる數個の新聞があり、同時にまた『新聞トラスト』に屬するものが、其中に必ず二三ある。『新聞トラスト』とは、『カーキンズ』、『キャッパー』、『マンジー』、『スクリップス』、『ハースト』など稱する新聞雜誌業の『トラスト』である。強食弱肉の世界では大魚は小魚を嚙下するが、夫れが新聞界にも行はれて、大新聞社は附近の小新聞を買収し、而して新聞連鎖を造るのである。夫から經營困難の雜誌社をも兼併する。此れは新聞は雜誌を助け、雜誌は新聞を助けるからである。彼の『株の賭博者』を以て自ら許す『マンジー』は、三

雜誌と數個の新聞を所有する。ハースト系といふのは、十二個の新聞と『ハースト雜誌』、『コズモポリタン』其他の四雜誌を有し、而して『ハースト』新聞には、毎月これら雜誌の廣告のための論文が載せられて居る。此れは誰れも知るところの事實である。此外七個八個若くは夫れ以下の雜誌を兼營する者が頗る多い。彼の『マンジー』、『アトランチック』、『ウォールズワーク』、『スマートセット』等は、何れも其配下に三個づつの雜誌を持つて居る。

## 二 如何なる目的にて新聞を持つか

英國でコ、アと石鹼の販賣のため、連絡出版の幾多の連鎖ある如く、米國に於ても衣服ドレスメイキングの型の販賣に連絡あるものに『バテリック』社といふのがある、此れは七つの雜誌を有つて居る。活動寫眞と『マックリユア』誌、雜貨店及び株式操縦の『マンジー』誌豫約本販賣と『コリヤース』誌、辭書と『リテラリー、ダイジェスト』誌の如きも

如何なる目的にて新聞を持つか



のであるが、之を擧ぐれば讀者の直ぐに合點するものも夥しくあらう。書籍出版商が自己の書籍を廣告し之を批評するために用ふる雑誌の少くないことは、誰れも知るところである。

英國のノースクリップ卿は、現在各種の新聞雜誌五六十種を有つて居る、近年彼はロイドヂョウヂパトリナルクラレンと喧嘩をした。元を糺せば彼ロイドヂョウヂの政策の御蔭で、大利を博したのであるのに、斯かる舉動を敢てする程の彼は、此の大事業の方にまだ力の不足を感じてか、新聞の賣物を物色し幾百萬弗を抛つて近く『クロニクル』を手に入れた。一新聞に惜氣も無く、斯かる大金を出すといふのは、其の建物や印刷機械や其の名稱を買ふのみでなく、新聞の暖簾を買ふのである。別言すれば讀者を買ふのである。之に由つて讀者の心理を變へやうとするのである。此内幕を知れば何人も反對しなくなるが、彼等は誰れにも分らないやう最も秘密に最も器用に受渡しをするのである。内外に重きをなしてをる彼の『ニウヨウク、タイムス』でさへ、此傳で幾度となく

所有主が變つた。けれども其の所論の調子は常に莊重に且つ威嚴があつて讀者は更に夫れに氣附かない。これは新聞が甲から乙へと賣買される時、其の記者も同時に賣買されるからである。

『ニウヨウク、イーヴニング、ポスト』は以前は餘り過激な方でもなかつたが、戦争中から英國に對して頗る面白からぬ振舞をし出した。應て『ヂェ、ビ、モルガン』エントコム、ニー會社が、英國の債券何十億弗を賣出し同時に米國に於ける同政府一切の購入品を取扱ふことを知つても、其の執拗な態度は少しも變らなかつた。然し其後露國勞農政府が聯合國間の秘密條約を公表したときに其の全文を掲げたものは米國で社會主義の新聞以外では獨り此新聞あるのみであつた。後とて思ふと其頃は材料と賃錢騰貴とのため、非常な財政上の苦況に陥つてゐて竊に社内之を『ウォール』街に持ち行かぬとの申合せの上に、善後策を講じてゐた時であつた。夫れより三週間を経て、終に『モルガン』會社のラモント氏の手に落ちた。所有者は分つたが、買人の名が知られず

如何なる目的にて新聞を持つか



居たところ、此の新聞は講和談判の時その『天の聲』欄で喧しく議論して、佛國をして『ザール』溪谷を擱ませ、日本に山東を取ることを命令し、又露國勞農政府に對しては、其帝政時代の國債を支拂ふべく命じ、夫れには『ヂエ、ビ、モルガン』會社の銀行の手を通して列國に支拂ふべしと論じた。讀者若し此種の新聞紙から、英國政府といふ大商會社の説を拜聽するを厭ふならば、去つて『ニウヨウク、イーヴニングメール』を見るがよい、此れは現に獨逸政府の金で買收されたものである。斯様にして米國全體に涉り、鐵道會社、電信會社、砂糖『トラスト』等の機關紙は、いくらでも之を數へることが出来るのである。

新聞で惡錢を儲けた一例が『ローサンゲレス』にある。此市の水道は遠くの山から引いて來るのであるが、市の金權者の一連が山から市迄の土地を買占めて居た。又此市には四つの新聞があつて互に激甚な競争をして居たが、この四新聞の關係者が何れも此の地面の若干づつを所有して居た。彼等は申合せて此の地面の上に水路橋を造ら

うといふことに一致し、數年に涉りて記事の間に晝迄も入れて水道斷絶の場合の危險を高唱した。まだ其上に、無法にも、貯水池から出る水を風致を添ゆる爲めと言つて市内の各公園に引くことを許させた、市民は水の不足と萬一の場合の慘害とを虞つて終に水路橋を造ることに決定した。其の結果として元は一噓<sup>エカ</sup>四十弗の地價であつた地面が、急に千弗以上にも騰貴したのである、斯くて此の利得の配分で、一人當り百萬弗を取つた者さへある。

さて此『ロ』市にオーチスといふ仁があつて、市内に二つの新聞を有つて居る。一つは『ローサンゲレス、タイムス』で、黨派から云へば共和黨、勞働問題に就ては、『オープンショップ、ポリシー』(勞働ユニオンに屬する者と屬せざざる者を同一工場に併用する主義)を採り大に勞働者に憎まれて居る傍ら其の一方に『ヘラルド』と稱する他の新聞を有つて居る。此れは表面獨立新聞と稱して居るが、民主派の新聞であつて、『クローズ、ショップ』(ユニオンメ<sup>イ</sup>主義を唱へて居る。即ち二股主義と言ふか、兩天秤主義と言ふか、轉んでも決し

如何なる目的にて新聞を持つか



て轉ばない工夫をして居るのである。彼は段々金を儲けて南部メキシコに六十五萬噐エーカーの土地を買つた。デアズ大頭領失脚の時オーチスは彼を墨國外に出してやらねばならぬ破目になつた。其の必要上彼は革命の革命をメキシコ國內に起さねばならなくなつた。斯くて數年の間彼の所有する新聞は米國の墨國干涉とその征服とを實現させんため全力を揮ふに至つたのである。曾てオーチスの婿『タイムス』の社主チャンドラーは、秘密に墨國に兵器を積出した事實から檢事によつて起訴されたが、如何いふものか間も無く免訴になつた。

ハーストも亦墨國に莫大な地面を有つて居る。彼は墨國が合衆國に征服され併合される曉には、其土地の直段が、幾倍にも幾十倍にも騰貴することを知つて居る。故にハーストは自家の諸新聞を用ひて既に十五年間も米墨兩國の間に事端を惹起こさすべき手段方法に供して居る。ハーストは米西戦争を拵へたのは自分であると云つて、常に之を自負して居る。彼は戦争畫を描かせるため畫家フレデリック、レミントン、

馬に遣はした。レミントンは玖馬に来て見たが、何處にも戦争が起りさうな氣色が見えないので、不思議に思つて其事をハーストに打電した、ハーストは斯く返電した。

『君は畫を作れ、余は戦争を作る』と。之は一八九七年か九八年の事である。

今日でもハーストの新聞『ローサンゲレス、エキザミナー』を見れば、彼れハーストの墨國における土地何百萬エーカー噐を、我米國に併合させるために血腥い手段を取らせるべく我等の心を捉へんとする彼の企みが明瞭に判る。『ハースト』新聞も、『オーチス』新聞も、如何に政府が墨國侵入の準備をなしつつあるかを知らせるべく、間斷無く念の入つた記事を掲げて居る、又夫を信じさせるやうな外交交渉、軍事的準備及び苦心した完備した且つ明かに信憑するに足るべく見ゆる如き記事を載せて居る。過般國務省から『政府に曾て斯かる企圖なし、又斯かる準備をなしたること無し』と、公式の否定を出したことがある。其時でも『タイムス』と『エキザミナー』とは、其の正誤文を掲げながら、一向お構ひなしに、不相變その記事を續けて居た。新聞が嘘か、國

如何なる目的にて新聞を持つか



務省が詐か、どちらかが國民を欺いて居るに相違ない。

### 三 新戰國策と「蛇蝎新聞」

過般の世界大戦争を造るのに、歐洲の新聞が何のやうな働きをしたかは誰れも知つて居る。獨逸の『クルップ』會社は、佛國の獨國に對する憎惡を挑發すべく、獨逸の蛇蝎新聞紙を手に入れ或は之に補助して、思ふ存分に夫れを使用した。同時に佛國の主なる盲目的愛國主義新聞の幾つかに補助金を與へて、新軍事費が獨逸議會を通過せねばならぬやう、獨逸に對して攻撃と脅威を公にさせたことは、知る人ぞ知る事實である。カール、リーブクネヒトは或る機會を捉へて、獨逸國內に此の汚辱を曝け出した、獨逸の支配階級は、決して之を容赦しなかつた。而して前回の反亂の時、彼等は彼を殺して其の復讐をした。

往年露國過激派政府が公表した各國秘密條約のうち、戦争の最中に於て巴里駐劄

の露國大使が、露國の君府略取に列國の認諾を得る外交上の交渉顛末を本國政府に報告したものがあつた。此中には大使が如何に佛國新聞を操縦したかを語り、且つ伊國が北亞弗利加のトリポリを掴まんとした時、如何に新聞を利用したかを明かに指摘して居る。曰く

『我國が巴里で良き新聞を有することの、何よりも緊切なることを知るのが此の際最も肝要のことと思ふ……余が新聞に提供する金を有つことの如何に有要であるかを示す一例として……余は如何にして伊國のチトニー大使が最も徹底的に、且つ最も大膽に露骨に、主なる佛國新聞紙を操縦したかを知る、其結果を見れば誰の目にも直下に了解か出来るであらう。』云々

吾等は歐洲の出來事として、此様な汚辱史を讀み而して戰慄する。而して吾等の『自由の樂土』がもつと清潔であることを知り之を賀する。然し乍ら米墨關係の事は如何である。假に吾等を教養ある墨西哥人の地位に置いて、夫がどう見ゆるかを考へてみ



るがよい。米國の財政的企業家が、墨國に金を持って来て、墨國政府を買収し、全國の最も目星しい土地や石油坑や鑛山の所有権を獲得する。心ある墨國人は斯かる腐敗せる政府を顛覆し、而して是等の適法に盜取された財産に對し課税せんことを企てる。然し列國政府は、此種の財産は課税すべきものでないと主張する。以上は事實も事實も争ふ餘地の無い事實である。而して是等外國の利害關係によつて、所有され發行さるる諸新聞紙は、久しきに涉つて墨國に對し念の入つた讒謗や、罵詈の戦を仕向ける之れ皆米國をして墨國人に戦を仕向け、自分に都合の良い様な結果を持ち來たらさん爲である。是等の事は考へのある人々が誰れも知つて居る如き、『オーチス』の新聞や『ハースト』の新聞のみでなく、十分に重すべき『紐育タイムス』や『トリビューン』や、『市俄古トリビューン』の如き新聞さへ行つて居るところであるから驚く。

今日の米國の新聞は、斯様に無限の野心を包藏する人々によりて所有せらるるのである。されば若し諸君にして、大新聞若くは大雑誌の發行者となるならば、諸君はそ

の團體に於ける支配階級の人となることが出来る。總ての公會の席上において、首要の席に案内されることも出来、其の席上において、何時でも思ふ存分に發言することが出来るのである。諸君はマコーミックや、『カンサス』州のキャツパーの如く、八新聞と六雑誌とを所有するがために上院議員ともなり得るのである。而してダニエルの如く内閣の一員ともなり、ホワイトロウ、レッドや、ウォルター、ページのやうに、大公使ともなり得るのである。諸君は榮華の浪に乗り、諸君の家族は之に浴し細君や令嬢は、最上社會に移ることが出来る。然し是等の凡ては所謂權力者と行動を俱にし彼等と調子を合せ行くことを必須の條件とする。故に萬一何かの機會で彼等と衝突するか、彼等の内規を破ることがあると、忽ちの裡に種々の形式で彼等から來る不愉快な壓迫を受けねばならぬ。即ち諸君は俱樂部で除名され諸君の家族は集會に呼ばれなくなる、斯様な事から迫害が始まるのである。

米國新聞業の盛況の裏面には、此様な隠れた力が働いて居る。而して彼等は如何な



る方面にも、富と勢力とに與して、その拜金宗の傳道者となるのである。其の新聞の一欄一項は悉く『金を儲けよ、然らば其他の總てのものは汝等に加へらるべし』との説教である。諸君が毎朝又は毎夕、新聞紙を手にして世間のニウスを讀んで居ると思つて居る時、事實其讀みつゝあるところのものは、或る權力によつて選まれ、修正され且つ變改された『プロバガンダ』であることを知らねばならぬ。

斯の如く米國新聞紙の爲めにする曲筆や輿論の裏切りは決して一朝一夕の思附きで出来上つたものでない。遡れば約廿五年のあひだ熟慮計畫して組織的に行つて居る事である。而して夫れが今日に於ては、一の學問一の技術となつて居る、斯道の老練家はその生命を之に打込んで、工場所有主等と會合し、人心の状態を報告し、甲の問題に就ては如何に之を公表し、乙の問題に關しては如何に記事を抑壓すべきかを決定するのである。彼等は斯くして公衆心理を創造する、此れが犠牲となる讀者諸君は氣の毒ながら白熱燈下の蛾の如く、自分自身では如何ともすることが出来ないのである。

歐洲に蛇蝎新聞レインタイルグレスといふものがあつて政治家や時の政府のみならず會社の創立者や、『フィナンシヤール』等に向て其の議論オピニオンを賣り物にする。巴里の『ブルス、プレス』など其の一例である、此等の新聞は大相場師や、工業的企業家に都合の好い報道を、その欄内に公にすることに依つて、定まつた金額を受取るのである。私は是迄此様な悪事は米國に存在すまいと思ひ込み、心竊に喜んで居たが、今日夫れが最も露骨に種々の場合に廣く我國にも行はれて居るのを知り、驚き且つ失望して居るのである。近い一例を擧ぐると先年ポストンで瓦斯の料金引下げの抗争があつた時、現に今高等法院の判事をして居るルイス、ブランドス氏が一般公衆の利益になる一案を立てて之を發表したことがある。之に對しポストンで氏の議論について、半欄の記事を載せた新聞が唯一つあつた、而して他の新聞紙は僅に一二言だけ申譯的に此事を小さく書いたのみであつた。然るに時を同うして、全市の新聞は擧つて一行一弗を拂つた瓦斯會社の廣告を一頁大に刷出して心ある讀者を聳登せしめた、何といふ皮肉であらう。米國新聞の



賄賂取は、既に今日では一の大仕掛けの企業となり了つた。此の事實は政府の公にした報告でも公表されて居る、此の報告書には無数の生きた證據人の名が列擧されて居るのである。

#### 四 「アツソーシエテッド、プレス」の天下

次に言はねばならぬのは、彼のアツソーシエテッド、プレス(日本では聯合通信と云ひ主なる新聞紙は皆此通信を受けたる)の事である。以下略してAPといふ。之に關しては一九一四年四月の『ピヤソンス、マガジーン』に出た、GEラッセルの書いたものが、私の讀んだ中の最も明確な記事である。彼は次の如く言つて居る。

「合衆國において其の勢力の點から言つても、發行部數の點から言つても、社會より認められてをる新聞の大多數即ち約九百の日刊新聞は、皆APの新聞通信(ニュースパッチ)を受けて之を刊行して居るのである。之を委しく計算すると同一の電報が約千五百萬回印刷され

夫れが約三千萬人によつて讀まらることになる、而して電報の詞の使ひ方や組立の如何に由つて、其の三千萬人の受くる印象は様々に變つて來るのである。斯くして讀者の説を如何様にも變へることが出来るのである。」

「此れは古來未だ曾てこの世界に出現したことのない、大きな力を造る恐ろしい機關である、歴史上の大獨裁者であつた亞歷山大王や、該撒や、帖木兒や、忽必烈や、那翁などがありし昔に思ふ存分揮つた其力、を巨大な一つに纏めたものを想像し得たとしても、それはAPの今揮つて居る力に比ぶれば、物の數にも足らぬものである。」

「人の思想は蓋し終極的の力である。三千萬人の人々に同じ時刻に同一の思想を起させる機關を有つ、地球上之に比すべき力が何處にあらう。」

「或は言ふ、APは或る利害關係の支配の下に居ない。決して彼等によつて所有され、管理されて居ない。或は言ふ、APは幾多の新聞紙が所有する相互會社であつて、假令へ之を所有する夫等の新聞紙其物が、或る利害關係者に依て所有されることがあ



つても、其の利害關係は決してA Pを所有し、支配し左右するものでない。A Pは黨派的な偏執的な新聞紙にも公平なる僻見のない通信を提供して、自己の潔白な道を歩む者であると。斯ういふ議論は、家は買ったが、其の基礎は買はないと云ふのと同じ理屈である。』云云

A Pが其の最大の力を注ぎ且つ自己防衛のとき、常に必ず持出す點は夫れが相互會社であるといふ事と、會社は其の通信を使用する數百の新聞紙に依つて所有され、又支配されるといふ事とである。ウキリアム、キツトルといふ人が、一九〇九年に『ラフレット』誌に、A Pに關する數篇の論文を出したことがある。當時キツトルは、一九〇九年の數字を取つて次の如く論じた。今日において同通信を使用する七百の新聞は、此の會社の投票權の七分の一に過ぎない。而して其の投票權の殘數は、會員中の或者に賣られた社の債權の上に在る、之に由て社はその死命を制せられて居る。事實これらの債權は、會員なる新聞社の投票權の七百七十五に對して、四千八百九十の

投票權を代表して居る。此の總計五千六百六十五票が取締役會を選擧し、何時にても新債券を發行する權力を有する、斯くて取締役會はその全支配權を、何時迄も保有することが出来るのである。何人が斯く會社を金縛りにして置くより外にもつと圓滑な術策のあることを想像し得よう。其處でM Eストーンといふ人が、公衆の前において自社の組織に關して、次のやうな宣言をした。

『我社はその本質が既に純粹相互的である、而して此の關係において正しく天下無敵である。世界の他の通信業の總てのものは個人或は數人の所有物である。然し我社は株券といふものを發行せず利益を擧げず配當をせない。我社は他人に新聞を賣らない、我社は會員内にのみ新聞を取り遣りする交換所である。』と

彼が如何に強辯を弄するとも、現に多數の投票權を握つて居る者は資本家新聞社の錚々たる連中である、此は争ふべき餘地がない。十年前キツトルは、A Pの取締役十五人の身元を研究したが、其人々は何れも大新聞の經營者のみであつた。而して此中

「アツソシエーテッドプレス」の天下



僅に一人が自由主義の人であつた、夫は『カンサスシチー、スター』のネルソン氏で、残る十四人は悉く保守又は極端なる保守主義の中に入れらるべき人々であつた。而も此等の人々に依て所有さるる十四の新聞は、廣告及び他の方法で銀行、信託會社、鐵道、市公益事業、百貨商店、製造會社などと結び着いて居る大仕掛けの商賣であつて、其人々は自己を支持する會社の威光を常に笠に着て居るのである。

爾來十年今日までA Pの役員に多少の異動はあつたが、此等の關係に於ては些の變化もない。十年前キツトル氏の叫んだ宣告は、今も尙ほ眞理である、今も尙ほ同一の事實である。

A Pは今米國で一番堅固な、甲鐵艦的獨占事業である。元はイリノイ州の法律で法人と認められたものであるが、其後同州の裁判所において獨占事業と宣言されたので、同州を去り、巧みに法律を胡魔化して會員組織の法人として會社を改造したのである。吾々が今カンサス邊の田舎に行つて朝刊新聞を出さうと思へば、A Pの特許は得るこ

とが出来、然しA Pに威勢を張る、四十一新聞の發行區域と稱する市や町の中に新聞を創めることは全然不可能でそれは恰も飛行機で月世界に行かうと企てるやうなものである、A Pの會員たる者は、抗議權を有つて居る。彼等は新なる特許に對して、抗議を出すことが出来る。彼等は自己の獨占權を保持するために、此の抗議權を無慈悲に行使するのである。尤も抗議に逆つて加入し得たものも二三無いではないが、夫等は何れも恐ろしい惡戰苦闘の後に獲たものである。A Pから加入權と排他權とを得るには、中央都市で安くとも五萬弗から二十萬弗位の價を拂はねばならぬ、夫は現に發行して居る新聞を買収することである。一向賣れない新聞も、A P加入の權利だけが値段で而かも其の値ひの大部分は、『ウエスターン、ユニオン』電信會社がA Pに許す特權即ち電報料の割引を得る特權であるのである。

A Pは俱樂部又は會員組織であるから、其の會員を懲戒し又は之を脱退せしむる法律上の權能を有つて居る。この權能は特にその認可狀の中に規定されてある、故に是



等の事項に關する役員の行爲は全く最終的のもので、其の行爲に對し訴訟又は抗論の權利は一切認められてゐない。此れが即ち一夜の裡に一つの新聞を潰す力である、二十萬弗も出した加入料は云ふに及ばず、新聞紙の全價值が瞬く間に打毀はされるのである、然かれども、悲哉今日米國に於て大なる日刊新聞はA Pの特許無しには決して存立し得ないのである。

A Pは新聞を押へて全然或る記事を出させない。一九一四年に起つた、コロラード州の石炭ストライキの如き非常な大騒動も、A Pが之を抑制して全國の新聞に篋口し唯一つの除外もなく悉く沈黙を守らせたなど其の一例である。

## 五 新聞の死命を制する廣告

篋口新聞の篋口さるる他の方法は、廣告補助金の方法である。此れは新聞雜誌に對する合法の贈賄である。廣告は新聞といふ<sup>ビッグビジネス</sup>大商業が、夫れに寄生する有象無象を養つ

て行く命の綱である。金額の上から云つて、今日の大新聞通俗雜誌は、其の讀者に依頼するよりも、遙に多く其の廣告主に依頼するのである。之は決して惡罵ではない。新聞雜誌と云つても、畢竟競争的廣告を公衆に提供するための道具であつて、其の記事は釣針の上に讀者を誘びき出して來る餌みたいなものに過ぎないのである。

現在に於ては、事實廣告が新聞雜誌の死命を制するものとなつた、之は餘りに明白な事實で、多くの人の知るところであるから、委しく語るの要はあるまい。唯其最も甚しい實例を二三擧げて見る。

『イーヴニング、ジャーナル』の、A プリスベーンが、包装を破つて直に食用に供する穀類の使用を憂ひ、食餌問題の論説を書いたことがある。之を見た同紙の廣告主らは赫怒して同氏を訪ひ雜誌の末終に年額十萬弗の廣告料を取上げて了つた。彼は又窮屈な帽子は禿頭を起すことを指摘した論説を書いたが、同紙に廣告を出してゐた帽子販賣商人は忽ち新聞社へ押寄せて來て、其の結果として彼は竟に歐洲へ旅立ちせねば



ならなくなつた。一人の廣告主は言つた「天罰だ、見よ、百貨商店ワナメーカーの  
不利益なことを書いた記者は、夫がために行詰まつて死んで了つたではないか。」と  
『チャイナリズム』の世界に、廣告主の権力の付き纏ふのは何處も同様である。私(シ  
ンクレア)は今美しい富豪町バサヂナに住む、而して毎日午後この地方新聞を讀  
んで世界の出來事を知るのである。然し此中には性質の善い、人目を聳動する見出し  
を附けたり誹謗の筆などを決して揮はない新聞であつて、其の廣告主に對する態度に  
なると、頗る感心しないものがある。是等の新聞の一面には、大抵活動寫眞の廣告が  
ある、夫れに接近して其の寫眞劇のために提灯を持つ記事がある、而して其劇なるも  
のも十中九までは眞にお話にもならぬ、下らないものばかりである。然るに其の新聞  
記事を見て居ると藝術の新紀元がこの活動寫眞町から出始めるやうな考になる。之れ  
は皆活動寫眞屋から送るところの、客寄せ目的の種である。活動寫眞に對し獨立的教  
育的評論といふやうなものは、此のローサンダレスやバサヂナの地方新聞には見出す

ことが出來ない。然し此れは活動寫眞だけの一例である、其他見切賣出しや、百貨商  
店の開店などには、矢張彼等は大に提灯持の役目を勤める。又遊び客専門のホテルの  
連鎖店に對しても同様である。是等のホテルを支配し其の財權を握る者は即ち其の地  
方の神様である。彼等の爲す事、彼等の言ふ事は、何時でも新聞の頂邊の欄に掲げら  
れる。

若しも新聞紙が、その大廣告主を保護しないとすれば、大廣告主らは慌てて自家自  
身の防護を實行する、之れは屢ば起る出來事で何れの新聞記者も實見するところであ  
る。時として記者はその奔命に疲れ、その記者生活を廢する者を生ずるに至るのであ  
る。茲に一つの談がある、『ロッキーマウンテン、ニウス』の編輯長であつたWLシエ  
ネレーは私に次のやうな事實を話してゐた。先年「コロラード」石炭ストライキのあつ  
た時、デンブー市の實業家等はストライキ記事の登載を禦ぐため、廣告及社交ポイコッ  
トを企てた、而して新聞の持主が其の新聞の論說に於て、ストライキ側を助けると見ら



るる間は、彼等をデンプー、カンツリー俱樂部に這入らせないと宣言したといふ。

ボストンの例を挙げれば、一新聞が少しばかり禁物の記事を出したため、其新聞社は四十萬弗の損害となり主筆は責を引て退職するに至つた。元來同市では銀行、百貨商店、公衆奉仕事業の諸會社の營業方針に反對する新聞は、頭から立行かないことになつて居る。此地のこの三大事業は鐵よりも堅い結束を作つて居るのである。此結束の上には打つても敲いても毫も何等の印刻を作り得ないのである。

ロ市のオーチスが左右の手に、別々の新聞を有つて居ることは前に挙げたが、彼は眞に抜け目のない新聞業者である。彼は賢い人であるから此の土地でも廣告主の結束中々堅く、マイチャント、エント、マニユフ、ハクチュラリス、アップリケーション通稱MMAと號するものが、市の新聞廣告の一切を支配して居てほんの些細な原因からでも、一新聞に廣告ボイコットを行ひ、之に致命傷を負はせる如き種々の恐ろしい實例を知り抜いて居るから、餘り名譽でも無い兩天秤主義などを實行して居るのである。

労働者に對しては、一緒になつてボイコットを行ふのを取締る法律がある。然し廣告主らが一緒になつて新聞雑誌をボイコットするに對しては法律は素知らぬ顔をして居る。

新聞雑誌がこの廣告なるものに養はれて居る御蔭で、之から甚しく惱まされて居る其の實例を挙げようと思へば材料は何程でもあるが、煩はしいから此邊で止めて置く。從來心ある者は、何とかして此の羈絆を脱せんとし反抗の烽火を上げたこともある。彼の有名なる『ピヤソンス、マガジーン』は嘘を書かぬ唯一の通俗雑誌として尊重されて居るものである、同誌の經營者は、廣告無しで最低價の新聞を發行せんと企てて居たが、未だ其の理想が實現しないやうである。

またウイルシニアといふ資産家が先年西部地方から數十萬弗の金を有つて來て紐育で社會主義の雑誌を起した。豫め斯道の經驗家に就て研究した末、兎に角四十萬部賣れたらば收支償ふといふ見込を立てた。彼は此の計畫の下に努力し懸賞や、種々の方法



で辛うじて四十萬人の豫約購讀者を得るやうになつたが、ハム、ベーコン等の食料品業、自動車、出來合服の製造業者、化粧品香水業者、上等農業者等は齊しく此の社會主義雜誌に廣告を依頼しない。ウイルシーアは困り抜いて到頭船を岩に打上げて了つた。而して米國で公平な議論を叫ぶには、如何しても金礦を有たねばならぬと言つて殘餘の金で或る金山を買ひ、爾來十二三年必死にその目的を貫徹すべく、盛んに努力して居るといふことである。

今より十年前、ロス教授は、『アトランチック、マンスリー』で、新聞廣告と新聞の收入について次の如き意見を述べて居る。

『三十年前には廣告料なるものは新聞紙の利益の半分にも足らぬものであつた。然し今日では夫が利益の三分の二を作るものになつた、之は單に利益の率であるが、金高から行へば、大新聞の廣告主から受くる金額はその購讀者より受くるものの七倍である、或る場合にはそれが總收入の九割に相當することすらあるといふ。米國の新聞が

八頁、十二頁、十六頁と頁數を増加するに比例し、新聞紙其物の價を三仙、二仙、一仙と引き下げて行く。今に必ず廣告料のみが新聞を支持する時代が來るであらう」と。

なほ前記『ビヤソンス誌』上で、一九一四年ラツセルが雜誌の計算を示したことがある。當時一ヶ月四十萬部を發行する雜誌でも廣告の收入毫も無いとすれば、只だ生産直接の原價だけで一ヶ月の損失が千六百弗に達することになつて居た。然し此れには寫眞版、原稿料、家賃及び給料を算入して居ない。今や或る大雜誌の如きは一部の卸賣値段が僅に三仙で、又他の雜誌はその原價だけが卸し値の五倍に附くといふ。左もあるべき事で、此不足は残らず廣告料に俟つのであるから、事の成行は想像に餘りあるのである。

現在大抵の雜誌といふ雜誌は、みな廣告の捕虜である。廣告主の思ふ儘、欲する儘になる様になつた。斯くて一部の大雜誌の前四分の一と後四分の二は擧げて廣告に捧げ、残りの四分の一は讀者の喜びさうな讀み物や記事である。而して多くの雜誌はこの廣



告の陥穽の所在まで讀者を釣つて行く道具になつて居る。讀者試に米國の主なる雜誌を手にして點檢せらるるならば、直ちにそれか判明する、詳しい説明は要しない。

## 六 如何に新聞紙を改善するか

新聞の自由、政治の自由、商工業の自由、之を推擴めて今、米國に眞の自由といふものがない。此うち最先に解決せられ無ければならぬのは新聞の解放であると思ふ。新聞が公衆管理の下に新事件を報道することは、公衆の利益であるといふことが一般に了解せられ、米國何れの都市に於ても何人を問はず新聞を發行しようと思ふ人は、申込書を送り通信實費だけの金を出せば、何の形式もなしにAPの通信が受けらるゝ様にすることは蓋し最大急務である。夫には先づ何うしても此の最も勢力ある、而かも最も不正なるAPの獨占事業を根柢から打破せねばならぬ。

今の米國の新聞に、虚構の記事の多い事實から、之が矯正策として一の法律の施行

を考へ附く、例之ば新聞記者が或人に面會しない前、面會して話を聞かぬ前、或は書いた話の筋を其人の校閲を経ない前、恰かも面會したかの如く、言ひもせぬ話を無斷で掲載するやうなことのないやう、又本人の承諾無しに他の談話や、論説を掲載するのをも罰するやうにしたい。又或人に對し間違つた記事を造り、之を公にして他人の注意を惹くやうにせしめた者は、次號にその記事の正誤を出させるは勿論、その正誤も曩の間違つた記事と同じ欄、同じ活字で、同じ位に人目を惹くやうな掲載振をさせなければならぬ。此様な法律は是非とも造る必要がある。

新聞の中には、他の新聞の電報を盜載するのがある。之が現今一般の風習となつて立派な新聞も行く、何うしても之を禁する法律がなければならぬ。他の新聞記事の一項を切抜き、夫れを書き直して電報欄の下に入れ、恰かも自社に着いた夫れの如く、何月何日倫敦發とか何とか書入れる。又或は自社に都合の好い政治的宣傳プロパガンダを書き、華盛頓又は紐育の特派通信員から電信で來た通信なるかの如く装ふこともある。一九一

如何に新聞紙を改善するか



五年九月三日の『ハーバース、ウァークリー』に『ハーストを攻撃す』といふ論文が出た。之れに據ると彼れの『ユニヴァーサル、ニウス、ビュロウ』は、世界的に聲名ある八十以上の通信員を有し、全國に通信を賣つて居るかの如く見せかけて居るので自然此處から出る『ユニヴァーサル、サーヴイス』なるものを何時も見て居ると、歐洲各國の首府に配置された同社通信員と毎日御馴染みになる譯であるが、驚くべし其實之が悉く架空の人間である。總て是等の新聞は、皆紐育なる『ハースト』社で書かれたものであつて、多くは倫敦朝刊新聞の記事を電送して米國の午後版に入れるための焼き直しに過ぎないのである。此の行爲は明かに詐偽である。米國の法律は刻印の無い食料飲料の發賣は嚴禁して居る。然るに法律は何故に新聞通信の是等の不都合を取締らないのであるか。

最後に來る矯正策は、新聞の州有市有にありはせぬか。然し之は唯だ一部の解決であつて、決して全部的の解決ではない。米國に較やこの精神を實現したものがあつて、

夫れはノースダコタ州に根據を有つ『ノンバーチザン、リーグ』である。何れも週刊新聞であるが、現今七州に涉つて夫々掣肘や拘束を受けない自由な機關新聞を有つて居る。其のセントポパウルから出る『ノンバーチザン、リーグ』の如き毎號二十五萬部を發行して居るのである。

米國でも心ある少數の富豪は、新聞界の現情を憂へて、其の改革案に共鳴し後援して、資金を出すといふ話も度々あつたが未だ今日まで夫れが實現してゐない。自動車で有名な、デトロイトのヘンリー、フホードも慥に其一人であつた。依て思ふ、新聞記者は大抵は年の若い元氣活潑の人々である。正義の觀念にかけては、世故に老けた老獪の人々よりも純潔で美しいのが常である。彼等は彼等の責任を自覺し、一人一人に離れないで一市一州に同志の團體を造り、協力一致世の腐敗を防止しては如何。

以上はアプトン、シンクレアの議論と意見の大要である。著者は思ふ、新聞の州有市有論に至つては、蓋し大なる愚説であらう。露國の現狀今如何。尙ほ此點に就て

如何に新聞紙を改善するか



は次の英國獨逸の新聞論の項に詳述する。

米國の新しい政論家の一人に、ウォルター、リツブマンといふ人がある。彼れ年尙ほ若く、曾てハーブードを出でて直に『ニウ、リバブリック』の創業に従事し、その編輯同人となつた。同誌は人の知る如く米國新思想の淵藪である。彼は戦争中國務省に入り戦時情報局の事を擔當した。而して今日までに既に有名なる著書五六部を出して居る。彼が『アトランチック、マンスリー』誌に載せた論文『自由と新聞』<sup>リバチ、エンデ、ビニウス</sup>の一部分を左に紹介する。

現代の新聞紙は如何に之を改善すべきか、其方法大略三に歸すべきかと思ふ。

- 一、新聞種の出所の保護
  - 二、何人にも理解さるゝやう新聞紙を組織する事
  - 三、新聞に應答する人心を教育する事
- 而して刻下の對策としては新聞の甚しき弊害を矯正する第一着手として、新聞の眞

實に就て人格的責任を定めることであらう。記事の各項毎に署名するは必ず必要とせず又餘り望ましいことでもないが、毎項何か證明を附し虚偽の證明は不法なりと定め而して新聞に掲載された事項は、其大通信社から來たものと記者の探訪して得て來たものと政府其他の新聞<sup>プレスビュロウ</sup>局から出た種と一々其出所を明かにし、而して讀者をして新聞の出所に重きを置くべきことを教へたい。

次ぎは誤つた記事に對する罰金よりも、他人に損害を蒙らせないやうに、適當な方法でその誤謬を正誤することである。斯くすれば結局記事は正確になる、之は較や難事ではあらうが茲は記者の天稟の技倆に俟たねばならぬところである。

記者の仕事は實際時間と教育費とをかけるほどの尊い職業でもない、斯様にして十分の教育を受けない人々の仕事になつて了つた。而して骨折の割合には報酬が薄く、不安定な裏面的な職業になつて居る。彼等のための大學教育の問題は、容易に何人の頭にも浮ぶ所であるが、又容易に首肯しがたい問題でもある。要するに記者は全然教

如何に新聞紙を改善するか



育に由つて造らるるものでない。記者は興味の主なる成層と時潮の流れとに就て、活きた知識を有たねばならず、又社會の新聞といふものは、殆んど常に或る特殊の集團から出るものだといふ事を知らなければ、一事件の表面だけを見て、流るゝ水の波紋や、寄せては返へす波や、潮の流れや、其底うねりなどを閑却することになる。彼等はレニンが何を言つて居るかコルチャックは何をなしたかを見るばかりでなく、其の言動の由て來るところの主因、又は動機を見なければならぬ。善き記者は廣き體驗によりて訓練された直覺力に依り事件を讀むが、迂濶な記者は其處に特別に讀むべき何物かのあることを知らないため、心を以て事件を讀むことが出來ないのである。

記者たる者は、新聞の主なる目的は、人類をして都合好く未來の方に生くる事を得せしむるのであるといふ確固なる見識抱負を持つることを要する。彼は、世界は流轉するものである、常に前方に常に上方に動くものではないが、必ず常に同じ所に停滯しないものであるといふことを曉り、而して變化の象徴の觀察者として社會に對する

彼の價值は、彼自身が夫れ等の時代象徴を選取する豫言者的辨別力の上に懸るといふ事を覺らねばならぬ。斯く述べ來れば記者たる者の任は、恐ろしく重きものとなる。然るに今之に對する社會の報償は如何である、或は此の報償問題が、何よりも最先に解決されねばならぬ問題であるかも知れぬ。

新聞を改善するために、理論を以て戰ふは際限のなきことになる。飽くまでも眞理のために戰ふ心を以てせねばならぬ。之れは難きを避けるやうに聞こゆるかも知れぬが、眞理には何物も抵抗することは出來ないのである。私は思ふ、吾人の眞の敵は『無智』である。保守、自由、革命、均しく皆苦むは此無智である。我等は根本の問題に立歸らねばならぬ。我等は多數なるこの無智この蒙昧を啓かねばならぬ。而して其の自覺を促がさねばならぬ。若し之を拒否すれば、民衆は教育で透徹されないもの、到底誨へて誨ゆべからざる者といふ結論に到着し、臆て『デモクラシー』の公準を拒否することになり、夫れが進めば獨裁者に助けを求めることにもなる。『デモクラ



『シー』が真正に自治的にならねば、右か左か何れかの獨裁政治に屈伏する外はない。但し此の道は民衆に不幸と混亂との外何物をも與ふるものでない。抑も自由とは何を意味するか。其の明瞭なる概念無しに、只管らに言議の自由、立論の自由を得んと争ふは、結局議論のための議論に墮するのみである。

現在の新聞組織は新聞記者の改善、訓練、其他の發達に依つて、今よりも尙ほ一層『デモクラシー』に役立つものとされ得るのである。唯斯くすることも出来る、斯くされねばならぬと言ふだけでは、其の可能の實現される時は來ない。然し局に當つて改革の本源を握つて居る今の人々は、之に就て餘り多くの利害を持ち過ぎて居る。隨て其の躊躇するのみに無理の無いところもある。

さて新聞界に變化が來れば、それが如何なる所から起るであらうかを考へて見ると、夫れは其の利害が現在の新聞制において代表されて居ない人々の自覺した、強烈な角逐に因てのみ來ると思ふ。今の儘では米國の新聞は、虚榮と無益の塊りである。之を

打破して新しい道を開いて行くには、飽く迄も商賣的コンマーシャル新聞事業に目標を置きつゝ、獨立の新聞を造る外はない。吾人の健全、吾人の安寧は少數者の自覺から始まる。廣告の如きは寧ろ小問題で、之は新聞發刊の重要な點に比し、何でも無いものであるといふことを理解し得るのは、獨り此の自覺した團體のみの能くするところである。英國の大購買組合が、あれまでに發展したのは、一に商賣に標準を置いたからである。若し新しい新聞事業が成功して、剩餘金でも生じたならば、夫れを積み置き、中央國際通信社の如きものを建つれば、理想が一層早く廣く實現されることになる。

所詮、新聞救済の途は唯二つに歸する。(一)は終局的のもので、新しい訓練と新しい觀方とを有つ人々が新聞組織の中に浸入して行くこと。(二)は眼前的のもので、かの因習のまゝ、常規を墨守して得々たる輩が犯して居る不行届に反對し、之れから離脱せんとする獨立的勢力を集中する事之れである。而して吾人記者が謙遜を學び、花々しからの職業をも忽せにしない時に吾人が眞理をのみ求むべきを知つた時、吾人が不

如何に新聞紙を改善するか



正確の雲霧の中で理想を論ずる特権よりも、更らにより以上のものを要求すべきを知つた時に、其時に世の新聞紙は始めて進歩するのである。

# 英 國

英 國



## 一 政府と新聞との戦ひ

一九一六年の冬、ロイドジョウチが首相となつた時、ノースクリップ卿旗下の倫敦日刊新聞は、熱心に彼を支持した。然るに其後首相と卿との間に意見の相違が出来てから、新聞の調子は俄然掌を反すが如くに一變した。首相は之に憤慨して一九一九年の議會に衆議院でノ卿に對し、手厳しい攻撃の演説をした。

之より兩者の確執は公然のものとなり、ノ卿の新聞は聯合内閣の上に、種々の批評を加へた、夫れも不公正な性質の善くない批評が多かつた。之より先き一九一六年戦争の眞最中アスキス内閣民望を失ひ、竟に現内閣と代つたのであるが、其の崩壊も歸するところは、ノ卿の『タイムス』の攻撃に原因するのである。當時『タイムス』と國中の他の日刊新聞とは、聲を限りにアスキス内閣の無能をワメき立てた。然し夫でも國民が時の首相が必要なる勇氣と努力とを以て、戦争をして居なかつたことを知らず

に居たならば、彼は尙ほ其地位を維持することが出来たであらう。當時の事情では假令ひ信頼の出来ない内閣であるといふ感じを、新聞の力で深かめ得ても、單に紙上の記事のみでは、内閣不信任の思想は造り出されなかつたのである。然し戦地から國內の隅々にまで行渡つた無数の通信、夫れと數千の戦時病院内で、日夕談話の種となつた政府の不用意と無駄の數々の實例などの知れ渡つたことは、竟に千丈の堤も蟻の穴から崩れるやうな結果になつた。『タイムス』は此の絶好の機會を捉へて内閣攻撃の叫びを揚げたのであつた。

政府と新聞雜誌との確執は、英國でも其由來は随分舊い、『吾人は新聞雜誌を亡ぼさねばならぬ。然らずんば新聞雜誌は吾人を亡ぼさん。』と、曩に唱道した左る巨人もあつた。アスキスも内閣崩壊の一年前、即ち一九一五年には、之と殆んど同一の激語を放つたとの事である。

新聞紙はその勢力を民衆から收得する。従つて其の讀者の數が増加すればする程其



の収入も大きくなり、且つ其『メガフホン』としての能力も増大するに至るのである。内閣の卿相は人民の公僕であるから今日の實際より言へば、夫れらの人々は公衆の聲なりと自任する新聞紙の命ずるところを行はねば其位置が保てないのである。此れが普通、人のいふ新聞紙の勢力なるものである。

願れば今を距ること六十五六年前から四十年前位まで（一八五五—一八〇年）は、實に英國新聞界の黄金時代であつた。而して當時の新聞紙は政治上に於ても巨大の力を揮ひ、社會からも又甚だ尊重せられたのである。十八世紀の初め頃においては、天才ある記者は、一管の筆の力に由り能く、下院に議席を占め得たのである。十九世紀に這入つても、『ベニー、ペーパー』で堅固な讀者を有する『モーニング、ポスト』の持主の如きさへ、其の新聞の持主たる理由を以て上院に入ることを得た。實際此頃の新聞界は眞に多士濟々の觀があつた。流石のグラッドストーンさへ、善き意味において新聞紙には随分惱まされたのである。

## 二 教育條例と新聞紙の民衆化

ケネデー、ジョーンズはノ卿の同勞者として知られ後に議院に入つて人で、倫敦新聞界の大立者である。彼は此様なことを言つた、『今より千年か千五百年も経つて、ギボンの名著「羅馬衰亡史」に倣ひ英帝國の衰亡史を書く人があるならば、其の第一ペーシを何處から書くであらうか。夫れは慥に一八七〇年の秋、彼の教育條例の施行するやうになつた時代からであらう。』と、實に此年までは、英國で讀み書きの教育は有産階級の人々の子弟のみに限られて居たのである。而して如何に教育を重んずる家庭であつても、父の収入が少くて、家族の多い場合には、其の子女は學問をすることを許されず、皆幼少の時分から勞働をさせられたのである。然るに此の教育條例の施行された結果として、小兒は上下を通じて或る年齢に達すれば、強制的に教育を受けさせらるることになつた。之れが即ち少年奴隸の解放であつて、英國の歴史上非常なる



大事件であつた。斯くて一八七〇年から後には、言語、人種、宗教、氣候、慣習、階級の不同が許す範圍的に於て英帝國を通じて、人は其身も心も魂も、全く自由にされたのである。一旦斯くなりたる以上は、今後において、人の自由の權、良心の權、言論の權、出版の權、教育の權を否定せんとする如き企ては、斷じて再び起ることが無いのである。

夫れから十年を経過すると、飲食店に於ても、珈琲店に於ても、勞働者迄が新聞紙を翻へして、其の雜報に目を曝すやうになつた。之が英國は勿論のこと延ては世界の文化に非常の影響を與へることになつた。ノースクリップ卿は此所に着眼し、聽て彼れ一流の新聞經營法を案出し、以て今日の成功を遂ぐるに至つたのである。彼が最初にその手腕を示したのは例の『デーリー、メール』であつた。この新聞は一八九六年五月（明治三十年）創刊當時、四十萬部を刷り、其後二三ヶ月間は、十七八萬を上下して居たのであるが、五年目に百萬部を突破し、更に今日では其の發行紙數が、百四

五十萬に上るといふ状態である。

明治二十年東京で出版された、天野鎮三郎氏の『泰西新聞論』に據ると、其頃倫敦で最も多くの部數を出したものは、『テレグラフ』の二十五萬、『デーリー、ニュース』の十七萬で、『タイムス』は十萬といふことであつた。『タイムス』は一七八五年（我が天明六年に當る）の創刊で、英國は勿論歐洲の政界に於て、今も昔に變らず、依然重きをなして居るものである。然し發行部數は今日でも割合に少いやうである。定價も其頃は、他の諸新聞が一片の時代に、三片であつた。其後各社の競争から、他がすべて半片になつた時分にも、『タイムス』は尙ほ一片を維持して居た。

最近二十年間において、倫敦諸新聞の品性人格は、絶えず變轉した。概觀すれば新聞の發行部數が著しく殖えれば、其の政治的勢力は著しく衰へる様である。然し社會的には非常にその勢力が加はつて來た、夫れは廣告で判斷することが出来る。若し夫れほど勢力の無いものならば、高い料金を拂つてあれ程まで廣告が集つて來る道理が無



い。然かるに何れの新聞も年々廣告の數が殖えて其收入が多くなる事實から見れば、今の新聞は昔のそれと或る異つた強い、動かす可らざる勢力を有つ様になつたことを知り得るのである。ノ卿の金庫である『デーリー、メール』一九一九年の廣告總收入は、一週一萬九千磅、年額九十八萬八千磅であつた。其の勢力はこの一事でも甚だ明白である。

### 三 歐洲大戰と新聞紙の發展

今回の歐洲大戰は、新聞界に多大の貢獻を齎した。『タイムズ』の如き、一片から以前の價の三片に復して、その昔の名聲と繁榮とを恢復するに至つた。例の『半片新聞』も、その名詮自稱の冷笑を打破つて、其の定價を倍加した。斯くて新聞紙は其の財政と勢力とを改善し得たのである。新聞の發行を著しく増加させるものは、何と言つても戰爭である。此は人心の秘奥に潜在する、冒險を愛する心から來るものである。幼時

には夫れが兵隊ゴッコとなつて顯はれ、成長しては夫れが生命を賭しての勝敗に興味を有つこととなる。戰爭ほど人心内秘の興味を唆るものは無いと見ゆる。普佛戰爭の時でも、南亞戰爭の時でも、矢張り同じ結果を示して居る。今では普通になつた夕刊新聞も、實は普佛戰爭當時の産物であるのである。

一九一四年八月、大戰の始まると同時に、英國でも新聞檢閲といふものが施行されるやうになつた。戰爭以前においては、日刊新聞は皆自己のリスクで、見た儘思ふた儘を、憚りなく公表し一つ間違へば、罰金若くは禁錮の刑を受け、甚しきは破産の憂目にさへも遭つたのである。戰時中の檢閲は、眞に苛酷峻嚴を極めたものであつた。其の結果、新聞記事は全く公衆の興味を惹かないやうな、小問題のみに限られることになり、而も何人も此の桎梏を脱することが絶對に出来なかつた。從來新聞の有してゐた權威は、全然この檢閲のため蹂躪されて了つたのである。

然し此の檢閲が行はれてゐた間（一九一四年八月四日—一九一九年四月三十日）に



於て、英國新聞の勢力は、以前に比べて著明に其大を加へた。此時より新聞社の社長なるものは、頗る偉い者となり、一國の大事件にも參與することを許され、且又夫を奨励さるるやうにもなつた。従つて其の所有し支配する財産は、その商業價值よりも、其の有する勢力で評價を定めらるるやうになつた。一九一七年『デーリー、クロニクル』が、『ベルメル、ガゼット』を曩に買つた同一の會社、即ちノ卿の手に賣渡されたときの價格即ち其の暖簾代は、實に五十萬磅であつた。新くの如くにして新聞は實に金權の強い野心家の野心を逞うし得る、唯一の機關となるに至つたのである。

一九一〇年の英國總選舉の時に於いて、政派に關係無く『プロバガンダ』の目的で、日刊新聞の廣告欄を利用することが始まつた。其時はホンの小さな冒険であつたが、後ち今回の大戰で、それが非常に大なる發展をなすに至つた。戰時中政府が新聞社に拂つた、(一種の)廣告料金は實に驚くべき巨額のものであつた。また一九一九年九月の鐵道『ストライキ』の時は、政府も、労働組合も、雙方新聞廣告の『プロバガンダ』

を盛んに使用した。其の廣告に餘計の金を使つた方が、餘計に新聞の態度を動かす得たと言はれて居る。然し此邊の消息に就ては、雙方とも其後沈黙して一言も語らないのである。此『プロバガンダ』の方法は、恐らく將來も續くであらう。然し政府が新聞紙の方針を變じさせ、自由に之を願使せんとする思惑を立てるなどは慥に大いなる謬見であらう。何となれば現今英國の大新聞の投じて居る資本は非常なる巨額に達し最早少額の贈賄位では容易に夫れを動かすことが出来ないほどに發展して居るからである。今日英國で新たに相當の新聞を發行するには、少くとも五十萬磅の資金を要し然かも此の資金で確かに成功するか何うかは疑問とせられて居る位である。

現在倫敦で發行されて居る日刊新聞の數は三十である、其中世間で『ノースクリップ』新聞プレッスと稱せられるのは今のところ左記數種である。何片とあるは一枚賣りの定價を示すものである。

タイムズ

三片

獨創的の論說記事に富み、其機關の完備と其報道の信憑すべき點を以て廣く内外一流の人士に

歐洲大戰と新聞紙の發展



讀まれ、其言論は歐米新聞界の權威である、而して世界第一の聲譽を保つこと茲に百年。

*Daily Mail* 一片 報道の迅速と氣の利いた編輯振は其特長である、輿論の製造に最も巧なりとの評がある。發行部数は恐らく英國を通じ第一位に居るものであらう。

*Evening News* 一片、夕刊としては有力にして又有名なれど畢竟二流新聞の部に入るべきものか。

*Daily Mirror* 一片、婦人向きの寫眞を思ひ切り澤山入れた小形の家庭新聞、發行部数は頗る多い。

*Weekly Dispatch*

*Sunday Pictorial* 二者共に小新聞の部に入るべきものなれども週刊としては較や有力である。

以上の六種が連繫してノ卿一令の下に直に同一行動に出づるのである。之に對し *Fulton Press* と稱する新聞『トラスト』に屬する新聞が四つある。夫れはノ卿新聞と反對に、今ロイド・ヂョウジを援助する側に在る。然し其中の *Daily Sketch* を除けば他は何れも勢力微々たるもののみで到底ノ卿新聞の敵でない、

倫敦の日刊新聞三十の中佛語のものが三つ、之には有名のもが無い。全體を通じて相當有力のものは凡そ十五位である、其の中には無論前記ノ卿新聞中の最初の四と

*Daily Sketch* (二片、一九一〇年の創立で其成功の迅速なりし點を以て有名である繪入報道新聞)とを含み其他は多分左の如きものであらう。

*Daily Chronicle* 一片、元は自由黨の機關として有名であつた昨今はロイド・ヂョウジの手に移つて居る。

*Pall Mall Gazette* 夕刊、二片、古き歴史あり、前者と共に最近屢々所有者の變つた新聞。

*Daily Graphic* 二片、英國社交界の新聞で繪入新聞の鼻祖である、記者に手腕家多く、記事に精彩がある。

*Daily News* 二片、自由進歩主義、社會改良に意を用ふ、其文學評論異彩を放ち、通信機關の完備を以て有名である、一八四六年の創立、新聞としての地位頗る高く有力である。

*Star* 一片、夕刊中の最も有力なるもの、前者と持主を同ふし、反獨逸主義で又共にロイド・ヂョウジに反對す、一八八八年の創立、小形の新聞紙で記事の敏捷を以て有名である。

*Daily Telegraph* 二片、英國上流階級を僥びせる如き極めて上品な新聞、其電報の迅速と正確さを以て著れて居る、一八五五年の創立、又一般の記事は清新と奇警の調に富むで居る。

*Morning Advertiser* 二片、英國の「中外商業新報」といふべきもの。廣く實業界に讀まれ、信用がある。

*Morning Post* 二片、保守主義、文學音楽及藝術等の記事に重きを置く、貴族間に愛讀されて頗る勢力がある。一七七二年の創立で倫敦最古の日刊新聞である。



#### 歐米新聞界の秘事

デイリー・エクスプレス 一片、帝國主義の新聞で、英帝國を固め、世界に於ける英國の利害を結束せしめんとするに努む、電報の登載に力を用ゆ。其財政、スホット、婦人欄は重きを置かれる。

ウエストミンスター・ガゼット 一片、穩健なる自由主義で文學趣味に富む。夕刊新聞、一八九三年の創立。

デーリー・ヘラルド 一片、這回大戰の末期に出現したものの、極端な社會主義的色彩を帯び、紙幅編輯振り總て大陸風で、頗る毛色の變つたもの、元は週刊であつたが、一九一九年の春今の名の如き日刊となり、純商賣的關係で成立すと自稱して居る、先年露國過激派から資金を仰いで居るこの評判が立つたとき、本紙は激怒して其然らざる理由を極力辯解し夫れから其風説は止んだ。資金の關係は別として赤露の何者かとの間に慥に一道の脈絡があるものらしい。勞働者の愛讀する新聞である、一般的新聞としては勢力微々たるもの。

戰時中倫敦に生れた新聞はヘラルドの外一九一五年に出來た デーリー・ワールド Daily World で之は猶太人の爲めの日刊新聞である。一體倫敦で發行される日刊新聞は他の各國の首都のそれに比して甚だ其數の少いのは事實である。然し發行部數の總計から云へば決して他國に劣るものではない。戰時中歐米各國を通じて新聞の發行高が著しく激増したものは

であるが。夫れが特に倫敦で著しかつたことは争はれない様である。由來新聞紙の發行高は一旦増加すれば容易に減少するもので無いと云はれて居る。然し今回のやうな異常の膨脹をなした後の形勢は果して如何であらうか。何れは非常に激烈な競争が斯界に演ぜらるゝことだけは確かである。而して其競争が如何なる方面で行はるゝかといふことは非常に興味ある問題として残る。

#### 四 女の世界と無線電信の世界

近年新聞界のために一つの新しい境地を加へられた、夫れは女の世界である。今から二十五年位前までは、女といふものは新聞界に何等の勢力もなかつた。然るに之が今日、商賣的新聞の注目点の集中點となつて來た。女はその天性が男子に比して、忠實であり且つ保守的である。故に新聞が一とたび之を捉へ得て、その家庭内に堅き地步を占むるやうになれば、廣告といふ見地から言つても、其新聞の地位は頗る昂る

女の世界と無線電信の世界



のである。又同時に此世界は政治に意ある者の決して等閑視してはならぬところである。兎に角女の世界は新聞に取り新しい世界である。

今日の新聞は人を要すると同時に、著しく機械力に依頼するやうになつて来た。電話、自動車、『ライノタイプ』寫真機から、飛行機、更に無線電信の使用にまで及んで来たのである。

無線電信は新しい新聞界の發展の一つである。戦争中に於て各國は、他國に對して其の公にせんとする新聞ニュースや議論オピニオンを、空中に向て發することを始めた。而して一時は四十萬語の多きを、二十四時間内に、世界の無線電信局から放射されたことがある。此様な大仕掛けの『プロバガンダ』は、從來何人も夢想だにせなかつたところである。而して此れは慥に無線電信でなければ出来ない事である。

現下露國の過激派と反過激派とは、雙方とも無線電信を使用して、小規模ながらも他國に『プロバガンダ』を送り、而して外間と通信をして居るのである。歐洲各國の

政府も、今は講和前ほど盛んに無線電信を使用せぬが、夫でも或る特種ニュースの新聞を他國に傳送するためには、大に之を利用して居る。之は善の方にも惡の方にも、發展する可能性を有つて居るものである。而して之が又政權を握る人々や新聞を支配する人々の手に非常なる權力を有たせることになる。

ケネデー、デョーンズは言ふ、『余の知れるところでは、獨逸政府は往年の失敗に鑑み、従前よりも更に速かに且つ直接に自國の新聞を支配し、又之を鼓舞するため、無線電信局の系統システムを立てんと計畫しつゝある。英國にても國民全體の精神が、新聞專賣ニュースモノポリイの或る形式に反對することなくば、無論、此國にも獨逸に劣らぬものを作り得るであらう』と。

想ふに次の十年間に於て新聞界に起るべき事件は、各國の新聞社がその屋上に、私設無線電信の装置を造り而して世界の各方面から通信を受くるに至ることであらう。其の間には暗號を手早く譯出する工夫も、完全に出来るに相違無い。また社内無線



電信の装置が出来れば、新聞を蒐集することが、今日よりも更らに速かになり、且其範圍も更らに廣くなるに違ひない。而かも新聞社は之が爲めに煩勞と費用とを省き、事業を一層手廣く擴張し得ることになるであらう。

## 五 戦時より平和會議の時代まで

西洋民主主義の現在の危機は、『ジャーナリズム』に於ける危機である。然しその原因を以て、單に新聞の腐敗其物に歸せんとする説には容易に左袒が出来ない。成程新聞の腐敗は事實である。又之れを腐敗させた幾多の分子のあることも事實である。賄賂、壓迫、金權支配、馳走、社交、そのほか種々な分子がある。然し是等の總ては決して現代新聞の状態を説明するものではない。

現在の危機を惹起した原因、それは戦争であつた。戦争時代の餘波が、今日も尙ほ波打つて居る。今回の歐洲戦争は、慥に新聞記者に之までとは異つた一種の抱負、

見解を抱かしむるに至つた。即ち新聞紙の最高の義務は、報道するのでなくて教育するのである。新聞を公刊するのでなくて、文化を救ふのである。夫れが爲めには所謂社會の耳目として、公けの事件又は事情を内外に報道するので無く、國民を馬車馬の如く、眞直な狭い路から外れないやうに、看守する事であるといふ見解を取らしむるに至つたのである。

米國『紐育ウオールド』のコップは言つた。戦争中の五年間は世界を通じて輿論の自由な發動といふものが無かつた。軍事上避くべからざる必要といふ理由の下に新聞紙は皆な徴兵になつた。各國政府は舉つて皆自國の輿論を徵發した、而して之を訓練し『止まれ！、足踏み！』を教へ、『氣を付け！ 敬禮』の姿勢を教へた。講和條約が調印濟になつても、英國でも米國でも多數の記者は、皆自己を捨てて、唯だ國のために盡すといふ態度になつた。甚しきは、國を思ふを欲せず、偏に國のために死せんとし、いふ程の考へを抱くに至つた。一般の風潮は、文化が犠牲を要求するならば、何時で



も公正とか眞理とかいふものを、犠牲にして惜まぬといふ傾向になつた。記せよ、人は眞理の爲めに生くるものである。然るに近代の新聞紙は國利を第一ナショナル・インタレストとなし、眞理を其次に置くのである。此代表者は英國ではノースクリップ卿、米國ではオックスなどで其他にも尙ほ幾人かある。

彼等はエデュケーション・ヴェラシター教化は眞實よりも大切であるといふことを信じ、且つ之を深刻に猛烈に顧念なく信ずる。然も信じて之に固着して居る。彼等は間斷無く説明して、『愛國心の前には、一切の考慮を讓歩し、而して之に盲従して行かねばならぬ。』と曰ふ、彼等は斯く言ふことを以て誇りとして居る。

彼等の愛國心なるものは、抑も眞正の愛國心であるか如何か、またその國利なるものが、眞の國利であるか如何かも大問題でなければならぬ。我等は誇る者をして誇らしめよと言つて、之を打捨て置く譯には行かぬ。何となれば彼等のために眞の輿論が梗塞され、正義公論が壓迫され、人の自由が束縛され、延て人類一般の不幸が醸成さ

れるからである。

過般歐洲内の各地で講和會議が開かれた時、講和に關する新聞の種は、殆んど皆會議の委員の代理者から外部に與へられたものである。而して其の殘餘は、議場の戸口に喧囂してゐた人々の口から漏れたものであつた。講和會議から歸つた特別通信員に會つた大抵の人は、彼等の書いたところは、彼等の實見したところであらうと思ふのは普通であるが、事實は蓋し大違ひであつた。例之ば這回の大戦其物にしても、何人も、其實況を手取る如く觀た者はない。夫れは塹壕内の兵士も指揮する將軍も同一であつた。人々はその目前の塹壕や、宿舍を見たばかりで、唯だ時折敵の塹壕を望み見たこともある、然し飛行機に乗つた人でなくば、眞に戦争を見た者とは云へない。故に通信員の偶々見たものは、戦争が濟んだ跡の戰場である。實際が此通りであるから、彼等の日々に通信したところは、單に通信本部で、通信員を一緒にして話された種ばかりである。否話すのを許され、書くのを許された種だけである。



從て講和會議の時でも通信者らは、時を定めて所謂四頭の人々に面會するを許された。然し其の四頭の人々でも事件を脱線せしめないやう、話の筋道を保つて行くことに恐ろしく氣を附けたから、肝腎の質問などには全然答が與へられなかつた。此事は其場に居合はせた人は何人も證言に憚らぬことと思ふ。斯かる實情であるから新聞種の不足は、會議の委員、その書記官、書記官の書記、及び其他の同業者との壅礙的會見に由て補はれたのである。之に附加へて、例の嚴しい檢閲のため、言ひたい事も咽喉に引込ませてゐる佛國新聞や、出稼ぎの地方英語商業新聞や、指定ホテルの待合控室の雜談などが、新聞の源泉をなして居たのである。此様な源泉に世界各國の新聞記者や、若くは知らず識らず之に致さるる各國民などは、其議論の根據とを立て、彼等の歴史の最も困難な批判の基礎を置いたのであつた。夫から其處には又或一二の外國の利益のため、或る事を或る國（例之は米國）に信じさせようと思へば、直ちに夫れを平生から訓練して置いてある其讀者に示すことの出来る特別御用記者なる者の

あつたことを附け加へねばならぬ。

斯くして集まつた新聞種も、夫れが英國や米國へ送るものであれば、更に海底電信局の檢閲を受けねばならぬ。歐洲に於ては法律上の檢閲なるものは、政治及び軍事に關するものに限るのであるが、元來此二つの語は頗る弾力ある語で解釋は如何やうにも成る、而して新聞の檢閲は、單に新聞種其物の實質のみならず、其の表現の仕方、活字の字體及び紙面の位置迄にも適用されたのである。然し現實の檢閲となつたものは、何と云つても其の傳送費即ち電報料で之が取も直さず高價なる競争、意義ある獨立を制限するに十分であつたのである。

現代の如く『プロバガンダ』の必要な時代に於ては、特に之が必要を感ずることの多い各國政府が苦心して、新聞の源泉をコントロールするのは、實に當然の次第である。殊に最近になつて甚しく濫用さるゝに至つた外交上の『プロバガンダ』なるものは誠に厄介千萬なものである。公衆即ち新聞の讀者が、現に世界各

戦時より平和の時代まで



國の紛糾した方面から受くる新聞は實に新聞ニウスでなくて、唯此の『プロバガンダ』のみであるといふのは誤りのない事實である。前に述べた如く露西亞のレニンと、其の反對者が露國の一切の新聞といふ新聞を兩分してコントロールし、互に烈しい『プロバガンダ』戦を演じつゝある。斯くなれば誰れか烏の雌雄を知らんやである。之は獨り露西亞の事ばかりでは無い。曩に波蘭ポーランドの境界線が問題になつた時の如き、事情に踈い各國民殊に遠方に居る米國人の如きは偏に雙方の『プロバガンダ』の力の強弱如何によつて、其の思慮と判断とを左右せられたのは事實である。

## 六 「プロバガンダ」の洪水時代

此項本年二月十六日の The Japan Advertiser に轉載した Herbert Bailey の署名ある Westminster Gazette の論文から

大戦以來、講和會議より平和會議の今日にかけて、各國の宣傳戦は日に益甚しきを

加ふる様になり、其の狀恰かも實戦の如く、戦闘は前線の背後遙かの後方にまで延長して居る。將を射んと欲すれば先づ其馬を射るの筆法を以て、新聞社は屢ば其所有主が替へられ、其の主義方針が變更せられ、近隣の同業者をして一驚を喫せしめたる例甚だ乏くない。今巴里に極端な一排英新聞がある。讀者は唯だ其排英主義のみを知つて居るが其實は米國の一石油會社が、竊に之をコントロールし、英國人が世界の石油供給權を獨占せんとする、其の企圖に對抗する目的で經營されて居るものである。

巴里の一新聞で、その賣れ高の莫大なるものが、最近内閣の一員で野心ある一資本家に買收された。之が極めて秘密に行はれたため、世人は毫も之を感知して居ない。斯かる事は倫敦を初め、英國にも近頃屢ば行はれた。今や各國政府の宣傳方法は、新聞社の賣收以外、他の方法を取るやうになつて來た。那威の一新聞が、最近英國外務省が普通の新聞種の如く装うて其の實、宣傳を散布してゐた事實を暴露して世人を驚かしたが、然し如何に英國政府の宣傳の手が廣いと云つても、他の歐洲の各首府や赤露

「プロバガンダ」の洪水時代



のモスカウほどに、其の巧妙さが發達して居ないのは事實である。

一昨年春、伯林にカップの反亂が起つたとき、米國の通信員らは其真相を探知すべく苦心の末、新政黨の宣傳局に就て聞いたが、各政黨ともに其言ふところが違つてゐた。更に政府側に行くと、政府の方でも其向々でまた其言ふところが同じでなかつた。斯様にして爾來同國で表向きに發表さるゝ通信は毫も信用すべからざるものであることを各通信員は曉つたのである。今日、赤露政府は、無線電信の宣傳以外に、旅客の制限、或は幾百萬部の小冊子、演説者軍、甚しきは宣傳列車をも使用して居るところとは周知の事實である。畢竟此方法も原始的のもので未だ考へが足りないところがあつた。反過激派の連中は彼等に比して更に一日の長ある如く、其の宣傳の方法は頗る巧妙伶俐で、然かも其の收むる効果は遙に多い様である。

外國政府の宣傳者が、英米二國に行ふところは、英米の新聞記者が外國に對し到底實行し得ないところである。是等諸新聞紙の多數は、外國から來る通信を取扱ふ通信

社及び其通信員に従屬して居るから、其の通信が外國政府の宣傳にあらずやといふことを詮索する要は無いのである。今日、世界に現存する一切の通信社は其二三微力なものを際き、何れも其新聞を送付し來る各國の首都の通信社と關係聯絡を有つものであることは未だ廣く知られて居ない。實際彼等は外國通信社から新聞ニッスを買ひ、其代り當方の新聞ニッスを賣る、而して外國通信社の事務所は即ち彼等の事務所である、故に當方の通信社の代表者等は如何に手腕のある人物でも、其の助手は皆其國の人間であり、殊に夜間は大抵是等の助手が専ら執務するのであるから凡て思ふ様には事が運ばない、且つ事實是等の通信社も殆んど總て其出張先の國の政府から金錢上の補助を受けて居るか左もなくば、特殊の便宜を與へられ、唯從順に其の宣傳局の役目を爲し居る者に過ぎないものである。即ち彼等は其政府が發表を希望するものに對しては忠實に其命に従ひ、その便宜上抑壓を欲するものは謹んで之を抑壓する。

由來英米の新聞は、是等の外國通信社の通信には、甚だ動かされ易いのである。彼



の萊因<sup>ライン</sup>地方に於ける佛國の政策に關する曲筆的宣傳は、眞事實が倫敦紐育に傳はつた前に、普く世界に傳はつて居た。『クルップ』工場が竊に銃砲の製造を行つて居たことを、倫敦の一新聞通信員に發見されて、其の事實の動かすべからざる確證あるに拘らず、獨逸政府は直ちに無線電信を以て、その辯駁を倫敦紐育に送り、且つ其後も適當の間隔を置いて、同一事を繰返へしたのである。此事が成功して、英米其他の諸國でも其の通信が伯林政府から出たことを今尙は知らずに居るのである。

這回華盛頓平和會議の時でも、山東問題について日本の『プロバガンダ』は、恰も純なる新聞なるかの如くに、倫敦及び各地方の新聞に送られたのである。又支那の主張は日本の指金で抑壓されたといふ事實を、支那代表者が指摘して會議に訴へやうと思へば容易に出來たのである。現今世界の新聞通信業者間の錯雜した協定は、實に込み入つたものであるから、單純に新聞記事のみを讀で居る人は、何人でも其の記事の起因其の目的を知ることが出來ない。最近の『シレシア』問題は明かに其の實例を示し

て居るのである。現に昨今巴里に自社の通信員を有たぬ英米の新聞は、悉くその外國電報を、佛蘭西外務省の宣傳に依て満たして居るのである。今や世界は『プロバガンダ』の洪水時代である。抑も國際間の主要問題を此種宣傳の支配に依つて決せんとする國は眞に危哉である。然れども新聞の新聞を獲んと欲する銳意と熱心とは、そのため容易にそれが犠牲となり、不知不識宣傳者の奸計の好き餌食となるのである。各國政府が歐洲戦争から學んだものは、唯だ外交上の武器としての『プロバガンダ』の價値のみだと言ふのも決して誣言ではない。新聞も讀者も最早國際間の宣傳には飽いた。新聞紙が必要上等宣傳の具とならぬやう其の本源を清うし、豫め其薰蕕を別つ何等かの方法を講ぜねばならぬ時代が到着した。

## 七 民主々義と新聞紙

以下四章アライスの「現代民衆政治」から

『デモクラシー』を所謂大國に於て可能ならしめたものは、即ち新聞である。舊時代



の政治家は民衆が自治を叫んでも、夫れは口舌が達し得る狭い區域に止り而して口舌に因てのみ世間紛々の言議が起るものと観て居た。最近百年間、新聞刊行の發展は、廣い範圍に新聞を汎布して夫れに公論を示導する力を與へた。且つ更に其後に至つて電信が新事件と夫れに關する人々の意見とを迅速に廣大なる多數の世界に散布し、衆人をして事件と論議とを同時に知らしむることになり、其の結果新聞の發表する論議又は訴へは、人民の集團に對し辯士の口舌と同一の効果を以て大多數の衆人の心中に置き得るやうになつた。

之より先、自由を尊ぶ國々では法の許す範圍に於て、平時には言論出版の自由を國民に許すべきものと認めて居た。故に夫等の國々では之が憲法の明文となつて確に保障されて居る。従て群議盛んに起り、人はその適從するところに惑ふ、之れ自然の理である。然し斯かる國では假令新聞によつて一時誤らるることはあつても一般的自由は更に新聞を抑制する以上の良き働をするのである。

文明諸國が、交々君主獨裁政治又は寡頭政治から、十分な自治政治を造り出すべく、奮闘努力して居た數年間は、新聞は民衆の側に立ち最大の力を揮つた。新聞は政府の壓制と腐敗とを暴露しその利己的な誤つた政策を責め、自由の闘士を助けて民衆を覺醒した、而して輿論の力を具體化し集中し、此の故を以て大に民衆の信頼と同情とを博するに至つた。眞に新聞無くしては政府の武力に抗し、輿論の勝利を見ることが出来なかつたのである。

獨逸の鐵血宰相はこの大勢を觀取し、新聞の弱點を押へて、之を利用することを案出した。而して他の諸邦でも此例に倣ふものを生じた。夫は言論出版の自由を拘束するのでなく、眞相を傳ふる新聞をその源泉に於て毒する事であつた。

久しく自由主義に即した國假之は英米兩國の如きに於ても、過激な新聞記者がその統治者又は政治家の暗殺を勸説しないまでも、斯かる行爲を辯護したやうの事があつた。之は果して許さるべき事であらうか、動機が政治上に因したりとて殺人の煽動行



爲を正當なりとすべき理ありや、米國では曩に之を許す可らざる不正當なりと定めて處罰した實例がある。又一九〇一年大統領マッキンレーを、波蘭の無政府主義者が暗殺したのは、多分は新聞の文章の力之を激勵したのであつて、當時この暴舉に對する處置は右の論據に更に一步を進めたものであつた。人民の痛苦に對する憤ひは、國法に基く方法によつて要求し得られる國柄に於て、勝手に政治的暗殺を行ふ如きは『デモクラシー』其物に對する加害であつて、茲には暴君統治下の邦に在つてその暴君の弑殺を是認するに用ゆる議論を持つて來ることは出來ない。『デモクラシー』自らが、背後からの暗討に身を委ぬべきものでは無いのである。

更に他の問題がある、同じ一國の領土内にも状態の種々異つた地方がある、其異つた状態に關係なく原則の上から言論出版の自由を汎く附與せんと欲するも、事情が夫を許さない事がある、之は如何にすべきであるか。印度に於ける英國行政官は土語を以て發行する新聞に其の思想の何派なるを問はず、歐洲や北米で一切の新聞に許して

居る如き同じ自由を與ふるを不要なりと皆信じて居る。新聞に拘束なき場合には、無遠慮なる新聞を悪用して、其元を尋ね辯駁するに困難な而して無智の人心に毒惡な刺戟を與ふる虚構の記事を以て、公安を紊すのみならず諸種の不善を行ふ如き事實を生む。普通の刑法は有效的に此種の害惡を豫防すべく適用する事が出來ぬ。斯の如くして其の情操に於て、心からデモクラチックな英國人でも、其懷抱する『言論自由』の標語を印度の土語新聞に適用する事は不當であると認められた。以上の如き事情は自由政治の生血たる檢束無き公開は、恰も礦山採掘や隧道の開鑿に必要な爆發物が屢ば暴力的罪惡の目的に悪用されると同一の危険のあることを示すものである。

## 八 商品化したる現代新聞

現代新聞の傾向は、必ずしも其の將來を樂觀し得られなく成つて來た。夫は廉價なる新聞紙の發達に由てである、工業的中心地に於ける人口の激増、凡ての階級を通じ



ての讀書習慣の普及と面白き新話題の慾求から、新聞紙は従前に比して遙により廣く讀まるるやうになり、而して其發行部數が増加するに従つて何れも其の紙幅を増大し、且つ非政治事項を餘計に記載するやうになつた。斯くして成功すれば、金錢上の利益も少からず、實際頗る有利なる事業となつた、且つ今日では其の讀者の多數が教育程度の低い而して高級知識と名くべきものに對し、興味を有つこと少く却つて低級のもの即ち運動競技慘事而して殊に犯罪記事、男女間の紛紜等の如きものに興味を惹かるゝ如き部類に屬するものとなつて來た。故に或國々では此無教育な、無批評な、暢氣な讀者集團の支持によつてのみ榮え行く新式の新聞紙が出現する様になつた此種の新聞紙は從來は教育ある階級の輿論で押へ附けられて來たものであるが、今は其拘束から離脱し、自ら屈して群聚の趣味に媚び、而して他の階級或は外國人に對して放つ漫罵、若くは幾多讀者中その誣妄を發見する資格ある人、殆ど無しと見て發する斷言と煽動とによつて、讀者の感情と其偏見を激發せしむる如き賤劣なるものに成り下るやうに

なつた。低教育の社會層に在る衆人は此の式の新聞を讀んで、少しも他の新聞を讀まないから、従て其の愛讀して居る新聞が國民の前に、問題に就て如何に欺瞞的な着色を施しても夫れを發く方法を有たない、故に新聞は安心して其の曲筆誣妄を逞うし得るのである。

此種の新聞紙の跋扈するに従ひ、全體として新聞に一種の變化を來らした。即ち其の機能に新たに加つた方面が二つ。捨てた方面が二つある。

新たに加はつた一つの方面はその商賣的企業である。買はんと欲する人に新聞を賣る。廣告依頼者に廣告欄を賣る。従つて其の目的其の計畫は單純直截で不都合な點は少しも無い。唯だ金錢上の利益の獲得をのみ標的とする商事會社たるだけの事である。他の方面は公論を形成し公衆の行爲に影響を與へんとする指導者、助言者の夫れである。日日の新事件を論評し、或る意見又は政策を辯護し、又は之に反對する。其の辯護は公衆精神と社會公共に奉仕せんとする公平無私の心より出づると號する、而し



て此精神、此の心は新聞所有者の行動又は主筆の行動に動作する筈であり、且つ事實に於て屢ば動作する。然し勿論自認はせないが其眞の動機たるや利己的で、且つ貪慾である。故に新聞は只管に其所有主や僚友のため利益を擧げんとし、また新聞の援助を要求する人々が提供する金銭上の誘惑にも罹るのである。或る機會に臨んで、新聞の行動の背後に在る動機の何であるかを公衆が知らうとしても、夫は無論不可能の事である。而して不思議にも大抵の場合には其の自稱して公平無私の愛國心となすものも、世間には額面通りに通用し、普通の讀者に、その讀む新聞記事を信用させるところの同一の信頼心が、その記事に伴つた意見及び議論はまた夫等が假令ひ黨派的のものとするも、少くとも正直な黨派的のものだといふことを假定させるやうになる。斯の如くして新聞が新聞ニックスと廣告とを賣り、而して何人にも無害と肯かるる其商業的性質が、却て其事件を論じ政策を辯護する機能を行ふ時に方つて、其影響を及ぼすこと頗る内密に且つ從來より一層有力であり得るのである。

斯くの如く新聞が、社會の耳目として眞理を傳へ、人民の公平無私なる顧問として世に立つものだと稱せられて居ても、今や夫が一般の企業と何等選ぶところなく、單なる一の營利事業となり了り、所有主は主筆を控制し、彼をイジめ彼を矮小にするに至つた。苟くも一新聞の主筆たる程の者は、所謂文筆の士であつて、常に其の天分に誇り、其宣傳せんと欲する自家一流の説を有するものである。所有主は實業家で、権力と金力とを併せ得ても、彼は到底政治上の意見よりは金銭上の利益を主とする者である。主筆と編輯者とは至純なる公益心によりて鼓舞され、其筆にするところは正しく其信するところであるが、之に反して所有主は唯其新聞の發賣高を増加して利を得んとし且つ廣告から益多くの収入を擧げんと欲するのである。社會の耳目、社會の木鐸たる職能が、紙數増加の夫れと牴觸を來さんとするとき、後者の取らんとする途の單に讀者を擇ばす方針に出づべきは明かなる事柄である。新聞は輿論の趨向を察しつゝ、其後に跟いて行き刹那の感情を誇張し、之を強め、或はまだもつと巧妙なるは、



今起らんとする感情の一步先きに踏み出さうとするのである。新聞紙が利得を收むる他の形式は、一階級若くは私利を擧げんとする人々の集團が、新聞の後援を求むる時に發生する。而して夫れらの人々が保護關稅や鐵道敷設計畫の如きもの、又夫れより或る利益を豫期し得る施政の辯護を依頼さるゝ時自ら進んで活動し、其の利益に浴するるのである。

或は株式市場で俄景氣を煽らんとし、或は金になりさうな對外問題・殖民問題で、政府の行動を或目的の爲に左右させんとする。また金權團體が新聞を手に入れ、之を経營する傍ら其勢力を用ひて、他の營利事業を發起成立せしめ、或は政黨領袖連の野心を助長させるのである。斯かる場合には新聞の態度が、正直な確信に因てでなく、唯だ露はにされない動機から決せらるゝのであるから、此の内幕を知らぬ公衆は誤らるのである。然し此様な弊害が重大になつたと言ふても、夫れは『チャーナリズム』の調子が、概して公共生活のそれと共に衰退した二三の國だけの話で決して一般的に

左様であるといふのでは無い。

之よりも一層狡猾な、而かも有效な方法が他にある。輿論の構成に最も力あるは事實に如くものがない。故に其の意見を有力ならしめむと欲する新聞は、事實に因て或事件を問題化せんことを試みる。時としては新聞が事實を假定する、詳言すれば、一人若くは一政治集團の動機或は意志に就いて、一の理論を提出し、而して直に其理論を承認された事實かの如く取扱ひ、進んで夫れの上に他を攻撃する論據を建設する。時として又事實を案出することさへある。即ち流言蜚語を採り上げ、之を事實としての流説にして了つて、夫れに突起を與へ、其突起に對し反覆打撃を加へて公衆の心を打つ。然し此の方法を應用するには細心の注意を要する、何となれば引例にされた事實を否定する反證が擧げられ、夫が度び重なると、其の新聞紙の聲價が墮つるからである。論難曲筆よりも更に安全にして且つ利き目ある手段は、事實の選擇である。何れの論争にも證據に引用さるべき事實は、雙方の側に多數有る。若し新聞が豫定した



結論の方へ導き行くやうに、總ての事實の公表を巧妙に且つ系統的に選擇し、而して之に反する一切の事實を抑壓し又は簡短に切詰めて記載すれば、それが假令實際に於て、正當なる判斷を構成する方法を讀者から奪つて、事件を偽ることになつても直接欺瞞の責は之を免かるることが出来る。又眞理の抑壓は、虚偽の暗示よりも一層狡猾である。此消極的曲筆はその積極的のものと同様に、安易で且つより多く無事である何となれば人の罪を暴き之を斷ずることは頗る困難な事であるからである。新聞も黨派的辯論家も多少無意識的に此の罪を犯して居るのであるが、然し夫が新聞の手で行くと遙に效果多く、且つ常により多く熟慮して行ひ得ることになる。而して殊に對外政策の事項には、大規模に使用され得るのである。一八九八年、米西戦争の破裂前に於て、米國の新聞紙は一齊に玖馬で行つた西班牙の動作を、最も惡し様に書き立て、西班牙に有利な記事は殆んど悉く抹殺した。又南亞戦争の當時英國新聞の取つた行動は、一層之に比して著明なものであつた、其結果英國の公衆は何時も公正な判斷を下

すに必要な材料を有つことが出来なかつた。

斯かる實例は他にも少からずあるが、何れも新聞の誇張或は曲筆が、殊に外國との間に起る問題について、禍害を起すといふ事實を説明するものである。其論争が國內的のものなれば、公民は能くその事情を知り、且つ反對派の活動が事の真相を捉へ來つて虚偽の宣言や誣妄の說に對する答辯を提供するのを待つて之に依頼することが出来る。然し事一たび外國に關する問題となれば此の事は望まれない。此場合には政黨も新聞も議論に拘束を覺ゆることがない。爰に言議を慎むは常に不人望であり且つ非愛國者たる汚名を被せらるることになるから、新聞は第一に自家營業の利益を念とし、外國の側に都合善き事は抑壓曲筆するの方針を取る事になる。何れの國に於ても、新聞は他國との間に惡感を創造し、戦争を促成するに與つて力がある。一國は他國の事を口を極めて惡く言ふ。他國がその惡口に倣つて又其言を返へす。斯うした惡口は相互の疑惑と憎惡とを深かめる。總て是等のことも新聞が戦争に由つて利益する



からだと言ふ者もあるが、戦争は新聞社の経費を増加させるものであるから、戦争に因て新聞が何時も必ず儲かるとは定まつては居ない。唯何事にも最も抵抗力の少い方面を選んで當ることが最も安全有利な道であるから、彼等も之を知て此の途に出づるのである。斯うして、平均した人の愛國心或は少くとも其怒心を挑發させることになり、考へて見れば外國人を憎む道理は何時もさう澤山に有るべき筈はないのである、他國を呼んで非と罵るも、歸するところは理非共に己れ自身の方に在るのだと評するのを聽けば可笑しくも又面白くも感ぜられる。

### 九 匿れたる背後の指揮者

最近四五十年このかた、大新聞の勢力が著しく加はつたことは争ふべからざる事實である。讀者の數は増加しその購讀の習慣は發達し其の領域は廣まつた。夫れは全世界から新聞を蒐集し、唯各の専門家のみ之を扱ひ得る如き多くの新主題を取扱ふため

である。而かも其勢力の増加と共に新聞社の收入支出共に等しく増加するに至つた。其結果として以前に比し遙に大資本を要するやうになり、資力の強大なるものは成長發展し、弱小のものは枯衰する外無いこととなつた。

一の日刊新聞を成立たせる事は頗る高價にして且危険なる企業であるから、新しい競争者が偶ま現はれることがあつても夫れは極めて少い。殆んど何れの國の大都市でも、主なる有力な新聞の數といふものが比較的少くなつた。少くはなつたが従前に比し、遙に大なる勢力を振ふ様になつた。之は論説が精良になつたためでないと言ふのは、其書き振りが寧ろ曩日に比して著しく光彩を缺き、或國では頗る衰へた觀あるのでも明かである。且又社説なるものも、其の雜報記事に比し、その能働の大規模から來る勢威に伴ふ所謂大新聞の態度なるものに比して甚だ重んぜられなくなつた。斯くして論説なるものは衰へて來たが、記事の登載法が進歩したので、世人は喜び競うて之を讀むやうになつた。此事實から考へて彼等の斯く多數に讀むのは、彼等が新聞

匿れたる背後の指揮者



を信用するからであるといふ一種の推定を起させる様になつた。無視することの出来ない其勢力を認めて、各人は新聞の言ふところは皆他人も承認して居るところであると考へ、新聞の所見を甚だ容易に承認するのである。斯くて今や新聞は、順従を課する羅馬法王の如き大權威を以て、憚らず其言はんと欲するところを言ふのである。

新聞紙の勢威は神秘の力で高められる。新聞紙の語るところを讀む人のうちに、其讀む事項を書いた人の誰れであり、又その出所の如何、その智的價値の如何を知る者は極めて稀である。彼等の大多數はその新聞の聲は、超人の如きものから出る聲と思つて居る。夫れは彼等に承認を強ゆる催眠術的力を有て居る。或俱樂部で新聞社の内幕に通じた故老が、珈琲を前にして一友と語つて居る。

『要するに此のやうな雷鳴的論説は、君や僕が知つて居るよりは遙に少く事件の真相に通じて居る無經驗の尊大を持つた男が書いたので、何時も階子段を幾つも上つた煤けた暗い室でナグリ書きをやつて居る若い奴の仕事である』と盲目千人の世の中であ

る。大大多數の人々には、其雷は正に天空の高處から鳴つて居るやうに見え、或は大群聚の聲のやうにも聞ゆるであらう。事實に於て新聞は之を書いた、煤けた室の先生よりは以上のものを表現するものである。何となれば大新聞は、その背後にある大資本と共に傳統的權威を有ち、而して其の政略寧ろ商略は思潮や世論の干満を察し、如何にせば多數選舉民を喜ばし得るか、或は如何にして政府當局者を嚇かさうかといふことを研究しつつあるところの敏捷な心の寄合の混合作用の産物であるからである。元來が小事件であるのに、理窟つばい辯護のある背後には、何時も必ず新聞操従の權力があり、又その所有主が知らしめんと欲するものを報道し、見せざらんと欲するものに、知らぬ顔する權力が在る。印刷した紙面の魅力ほど不思議なものは他に無い、隣人の談話又は友人の書面に信用を置くことの少い人々も、印刷で夫れを見るだけの理由で新聞の言ふところは之を直下に信用する。新聞の不正確を當然の事とする一國に於て、新聞記事はみな偽りだと放言する人も、新聞で一人の政治家が攻撃され



るのを見ては、新聞が攻撃するのだから何か無ければならぬと信じ、彼に對し直ちに非難を辭せないといふやうなことも實際には有り得る事柄である。

新聞の勢力の増大を來した主要なる要素は、大抵の國では夫れが二世紀以前に比し『ソサエチー』と言つたものと知識階級とに依頼することの少くなつたこと、事實に歸し得る。其の活動の政治文學方面は從來意義多きものであつたが、今は夫れが商業的見地の大切さの増すに従つて減退した。新しい事柄を知るとか、職業上の便宜から新聞を購讀し、職業上の便宜のため夫れに廣告する人々の大多數に依頼することの多いため、所謂の教養ある人々の批評的判斷に従ふことが少くなつた。此の大多數の人人に取つては、新聞の政治的態度などは實は如何でも善いので、其様な問題には彼等は甚だ無頓着であり得るのである。此の點が新聞の乘じて、其發表する政治的新事件及び夫れが提供するその新事件の解釋を最も効果ある宣傳方法となし得る所である。其の實業界の上に有する大努力と、無精にして新聞の考へて呉れたことを、其儘喜ん

て受入るる多數讀者の上に有つ把握とに安心して、新聞は峻嚴な氣むづかしい少數者から出る批評などに顧慮する必要が更になくなつたのである。

## 一〇 新聞紙の勢力

五十年前に比し世情の頗る著しい變化は、最も卓絶せる偉大なる政治家の勢力と、新聞の勢力との消長である。昔虞翁やピールが有した勢力は、今日其の後繼者等の上に見ることが出来ぬ。その政治家と衝突を起した時、新聞の揮ふ勢力は慥に彼等を凌駕するのである。政治家が如何に雄辯であつても、其聲の達する範圍は到底新聞の廣さには及びもつかぬ。且つ新聞は不斷に讀まれるが、演説はその折々限りである。演説の長所は人格的魅力で有るが、新聞は夫れを缺く。然し卓越せる人格に必ず見るところの彼の攻撃性は、敵を作り、批評と謾言の火に身を曝らすことになる。彼は間斷なく自己の冤を反駁し非難を撃退する暇を有たぬものである。彼の非難を讀んだ人必



すしも彼の辯駁を讀むとは限らない。彼は人格的なる敵とは引組んで之を投げ轉ばすことは出来るが、非人格的なる新聞なる敵に對すれば、彼れ一語、我れ一語、その最後の辭を言ふ一段になつて、常に新聞に仕て遣られるのである。新聞は讀者に向つて何處までも證明を要する記事も、頑として是認された事かの如く取扱ひ得る。斷えず同一の議論同一の非難を繰返し得れば、又之を繼續的偶發的にも行り得る、斯くの如くにして相場や競技の新聞の間に狭んだ斷言や當て付けの記事に就て、其眞偽を確かめんとすることに全然無頓着な讀者の大衆の上に暴君的勢力を揮ふのである。是の如き戦法は、既にその智力と道德的威嚴とに因て、諸人の信頼を得て居る最強の敵手には別であるが、他の一切の者には必ず打勝ち得るのである。反覆といふことは、機關砲から發射する彈丸の間斷無きが如きもので、新聞の有つ武器の中最も恐るべきものである。

近代世界の最も著しい奇現象の一たる新聞紙の力は、二個の特色を有して居る。そ

れは毫も強制の分子無きことと責任の分子無きこととである。新聞の勢力に自己を與へまいと思へば自己の自由意志で夫れが出来る。必しも新聞を買ふを要せず讀むを要せず信ずることを要しない。讀者が新聞を以て案内者とするならば夫れは其人自己の行爲である、其人の勝手である。新聞は何等の強制をも有たぬ。又新聞は毫も法律上の義務を有たぬものである。従て法律が私人に對する防護なき攻撃又は不法行爲の煽動に加ふる夫れ以外の制裁には拘束されないのである。昔の格言に『權力と責任とは併び行はるべきものである』といふことがある。又『何人と雖も權力の行使を委せられたりとして勘定報告を出す必要なき迄信頼さるべきほど善良なる人無し』といふ語もあるが、茲に吾人は新聞に於て、良心が其用を制限し教導する外、何等の顧慮無しに憚るところ無く行使し得る權力の所在を見るのである。實に新聞は特定の個人に對する損害、國家に對する危害の證明せられざる限り、眞理を抑壓し虚偽を宣傳して民法上刑法上何等責を負ふことの無いものである。



公衆の中に立つて演説する政治家は其の個人なるが爲に、虚偽を語り眞理を曲ぐる  
 ことあれば必ず何物かを損失する。斯る場合に於て彼は告訴され、其有して居る尊敬  
 と勢力とを剝奪される。同一の行爲に對して、新聞を處罰するは頗る困難であり、從  
 て其の場合甚だ稀である。新聞は非人格的實體であつて、其記者は世に認められて居  
 ないのが多く、其主筆及び所有主すら、比較的少數人の間に知られて居る位である、  
 故に讀者を欺く意志があつたといふ證據が擧がつても、夫れが必然的に發行部數に影  
 響し、又讀者の心證を害するやうなことは殆んど無い。明白争ふべからざる事件は別  
 であるが、大抵はその勢力を悪用して刑罰を免れて居るのである。所有者も亦彼れが  
 自由手腕を揮はせるところの主筆も共に愛國者であり又善良の意志を有する人々であ  
 らう、然し彼等の行使する權力には毫も責任が伴つて居ない事だけは明々白々の事實  
 である。

社會に於ける新聞の勢力は、米國に比して英國の方が一層強いものがあるらしい。

然し國が大きくなると新聞の數が多くなる。且つ各自己の領域を有して居るので、小  
 さな國で二三の新聞が特に著しい優越を示して居る如き状態は見られない。英國でも  
 蘇國でも、政治家殊に議員候補者で、人氣の消長を甚だしく氣にする人々は屢ば新聞  
 の實力を買ひ被るのである。曾て總選舉の時、新聞力の重かつた方が、却て惨敗した  
 實例があり、又一議員で地方の各新聞の包圍攻撃に出會つた人も、數年間能くその議  
 席を維持し得たことがある。けれども大きい都市、例之ば紐育の如きでは、無智な選  
 舉人が多いため新聞の執拗な攻撃は一政治家を亡ぼして了ふことが屢ばある。一度放  
 たれた讒謗は、之を取り回へすことが出来ぬ。攻撃は防禦よりは容易である。而して  
 曲筆する種は無限にあるものである、其中にも戲畫をもつて、公人を罪に陥れんとす  
 る如きは、殊に始末に困るものである、選舉の時などに之が行はれるとそれが罪科た  
 ることの證明がなさるゝ以前、既に敵の企望した果實が其の手中に得られて了つて居  
 る事がある。國によつては誹謗の法律が十分な保護を人民に與へないところもある。



若し資本的團體が多數の新聞を掌握し、有力敢爲なる一人物の指揮の下に之を置き競争場裡から敵手を驅逐するため其恐るべき財力を思ひ切つて使用すると想像せば如何。商業界に於ける獨占の兇暴は、言論界に於て更に一層の暴逆を行ひ得る事になる、此の場合新聞はその豊富なる財力を利用して、各方面に於て最も充實した且つ最終版を出来る丈け延長して集め得た面白い新しい記事を提供し、又文筆に最も卓絶した記者を購ひ來り得るのである。其尨大なる發行部數を以て、同一色彩同一傾向の事實を表明し、反對の傾向の一切の記事は悉く之を抑壓或は挫殺し、讀者の心理を轉換させ得るのである。斯くすれば心の弱い政治家等は、竟に彼等の前に屈伏せざるを得ぬ。廟堂の大官等も只管ら彼等の怒りに觸るゝことを恐れる、外國でも直ちに其の上權を認容し始めるやうになる。若し此種の企業に融通するに其必要な資本と之を指揮するに必要な有爲なる頭腦とが結合さるゝならば、斯かる企業を容るるには餘りに狭い國に於て夫れが果して如何なる業ワヂをなすべきか、蓋し想像に餘りある。斯ういふ

事實は、偶發的のもので、常に有り得べからざる事でもあらう、然し實業界において集中と團結とが、如何なる結果を生じたかを知る人々は、決して新聞界に於て之を不可能の事と斷することはせぬであらう。此の如き新聞『シンチケート』の獨裁は抑も如何なる方法により對抗され得べきか。商工業の獨占を救ふの道はその國有である、然し乍ら新聞の國有は、國家それ自身を暴君となすもので、正しく其の禍害を一層甚しからしむるものである、故に此場合唯頼むべきは從來未だ嘗て試みられざる種類の強力なる立法あるのみであると思ふ。

英雄も時に遭はずんば、其天分を發揮することが出来ぬ、亞歷山も那翁も彼等の時代よりもつと早く、或はもつと遅く世に生れたならば、彼等の後世に貽した功業は之を見る事が出来なかつたであらう。之を逆にして、幸にも機會に際會すれば、天才ならぬ凡物も、能く大事を爲し得る場合あるといふ事を知らぬばならぬ。

新聞紙が其輿論を構成する力により、平民政治の運行に影響を及ぼし得る勢力に關



し、以上論述したところを要約すると左の數個條となる。

- 一、普通選舉は選舉人の數を無限に増加した。彼等は主としてか或は全部、新聞から其の政治意見を取得するものであること。
- 一、經營宜しく、且つ大資本を擁する新聞をして、微力なる新聞を競争場裡から驅逐するを得せしめた其の原因が、何れの國に於ても有力なる新聞の數を減じ且つ比較的少數者の手中にその權力を委ねしむるに至つたこと。
- 一、輿論に與ふる影響は、大政治家又は立法部内の議論に比し大新聞の方が遙に増大するに至つたこと。
- 一、新聞紙は、近來益商賣的企業となり、主として其の營業上の利益に汲々たる有様となつたこと。
- 一、新聞はその所有者、又は他の者の金錢的利益を擧げんため、其の勢力を使用することの誘惑に會すること多くなり、其結果、金權が威力を政治界に揮ふに際

し其最も有效なる機關の一となつたこと。

新聞の力は實際無責任の力である。其最も恐るゝところは唯發行部數減少の一事のみである。讀者の大多數なるものは、直接自家の職業又は運動競技などに關した事のみ興味を有ち新聞の行ふ政治的誤謬及び其反覆表裏の如きは、殆んど知るところなく又其注意するところでもない。

斯かる力は或る政治意見の公々然たる擁護よりも、新聞を操縱抑壓して、遙かに有效有利に活動し得るのである。而して又夫れは内治政策よりも、外交政策の方面に於て特に一層危険を藏するものである。儘に國際間の好意に妨害をなす主なる原因となり得るものである。

民衆政治的政府は、公民の大多數が正確なる報道に基き且つ良心より出づる其の自説を實行する事に在る、斯かる説の形成に資する材料が、公民を妨げて正當に問題の真相を判斷させないやうに作爲的に供給さるゝ國では、説は自然の道を取つて發生



せしめられず、却つて人爲的に製造せらるるやうになり、其結果は『デセクラシー』に禍害を來らすることになるのである。

新聞の有する力の濫用が招くところの危険を指示する事は、現代自由國に於て新聞がなしつゝある其尊い奉仕に汚辱を加ふる事を含むとは何人も想像しない所であらう。既に言つた如く、新聞が無ければ、古い時代の市民團よりも遙に廣汎なる領域に於ける『デモクラシー』は到底成立し得ないのである。新聞は政治家をして其聲を國民全體に徹しさせ、而して立法、行政の官公吏を國民監視の下に置かせるのである。自らは無責任ではあるが、公共事業に關係を有つ一切の人々には責任を強要するものである。余が茲に新聞に對する公衆の信賴を搖撼し、新聞の社會公衆に對して有益なる所以を傷け得る幾多原因を擧示し、世の注意を喚ばんと欲するのも、畢竟新聞獨り自ら斯く多くの有益且つ必要なる働をなし得又爲しつゝある爲めに外ならぬ。

## 逸 獨



## 一 戦時と革命前の獨逸新聞

獨逸の新聞紙も今回の長い戦争の間には、若干の疲勞を覺えずには居られなかつた。然し一般に新聞報道に對する非常に熾烈な要求が興起して、一刻も早く戦地の状況を知らんと欲する公衆の興味から、大都市の新聞紙は何れも其の刷出高を激増した。殊に街頭の一枚賣りが頗る多くなり、又新たに夜間晩く發行する新聞が出来た。一般に賣れ高が著しく増加したが、新聞社の經濟は頗る困難となり、事務は繁忙で而かも人手少く、賃金の騰貴と紙の缺乏に基く騰貴とは大に苦んだ。

さりながら、此の間に獨逸新聞の精神的充實は甚だ目醒しく、全國民の緊張した意氣は新しい敵に向て昂り、新聞は言ひ合はしたやうに祖國に對して忠實なる働きを獻げた。國民の驚くべき結束とともに、新聞も團結して其の行動を一にした、彼の社會民主主義の新聞さへ、尙ほ其數には漏れなかつた。戦争開始と同時に、軍事上の秘密の

漏洩を防ぐべく、新聞の檢閲が嚴密になり、掲載事項は甚しく局限され又拘束された夫は一通りならず手嚴しいものであつた。

通信の方法に關しては、獨逸海底電信の破壊と夫れに伴ふ外間との交渉からの幽閉に苦んだが、大新聞は『ヴォルフ』電信局の手で外部の通信を受け、中立國の通信社を通じて敵國の新聞を入れたのであつた。

之より先き、英國は戦争の起る一九一四年七月にならぬ前早く、獨逸の海底電線を切斷し國際通信機關から獨逸の閉塞を行つた。而して七月三十一日、巨額の金の輸送及び之に影響した紐育株式相場の電報の獨逸新聞に送らるるのを抑壓した。又其以前から東亞及び南米から獨逸本國に送致すべき一切の信書を抑留して居た。是等は何れも英國が獨逸に對して宣戦の布告をした八月四日以前の事件である。

英國の海底電線と『ルーター』通信社とは、歐洲と他の大陸との通信仲介の極めて首なる部分を支配するものである。英佛アンタントが生起して以來、『ルーター』・ロン



ド』と『ハヴス・バリ』とは、此アンタントの意義を擴めて、全地球上に彼等の所謂オプフェントリック・ヘンライメン輿論なるものを彼等の勝手に造り上げた。實際に於て英佛兩國の資本は外國新聞の大部分を支配するのであるから、英國はその資本の力で支配して居る新聞紙に依て、其の通信社が自國に都合の好い様勝手に著色した、傾向のある而して選別された通信を世界各國に供給したのである。

戦争開始當時は世界全體の海底電信網は五十二萬基キロメートル米であつて、其内四十五萬基米は英國之を支配し、之に對する獨逸の方は僅に三萬六千基米あるのみであつた。後年獨逸は此點に心付き、多くの無線電信局を建て、之を利用して其の缺陷を補ひ、更に之を妨害せんとする英國に對し、苦がき通信戦を試みたのである。然し獨逸は自己の國際通信に、著大なる缺陷のあることを覺つた外、何物をも贏ち得なかつた。

英と佛とは、其『ルーター』と『ハヴァス』とに依り虚報を世界に散布し、獨逸の不利を圖るに日も維れ足らぬ状態であつた。而かも其の一方に於て獨逸の私報を國

外に出させない様努力しながら、他方に於て夫れらの私報を逆用して軍事上、商業上少からぬ利益を竊取した。斯の如き手段で英國が海底電線を悪用したことは、佛國も明かに之を認めて居るのである。元來『ハヴァス』通信社は『ルーター』と競争の目的で作られたものであるから、戦後の今日は當初の目的通り『ルーター』に對して其の通信の正確と迅速とを競ひ、通信事業の國際的自由を獲んがため奮戦して居るのである。

話は元に戻り、戦争のため獨逸に起つた一の新現象といふのは、新聞記事の頗る單調になつたことであつた。戦時中新聞記事の統一否な劃一されたことと、之が廣汎に行はれたこととは小新聞には甚だ歓迎されたが、大新聞からは大いに非難攻撃されたのである。『ヴォルフ』通信社の各新聞社に提供した官邊から出た材料は餘りに豊富では無かつた。之に反し無償で廣く新聞紙に供給された公報や半官的通信種は非常に多かつた。大新聞の攻撃非難は即ち是等に原因したのである。戦時中新聞に對する官邊



の抑壓と政府の宣傳取次きの強制とは獨り獨逸ばかりで實行されたものでなく、交戦各國何れにも盛んに行はれた。這回歐洲戦争の突發時代から其の終末に近い頃まで、ノースクリップ卿は、實に英國の對外宣傳大臣であつたのである。

## 二 革命當時の獨逸新聞

戦後、獨逸に起つた革命は、獨逸の新聞業の上に甚大の影響を及ぼした。一九一八年十一月十二日、即ち事變の起つた四日目に、國民代表者の議決により、直ちに新聞檢閲の新設が布告されたのである。其の第一日目には、伯林の數個の大新聞社は、急進革命者の集團によつて占領され、彼等の機關として社内革新を強制されたのである。翌一九一九年一月五日、伯林共產黨の一揆の起つた時には、先づ市中の大新聞社と、『ヴォルフ』電信局との占領に始まり而して全一週間は、夫れを活動させるため、人の任命の壓制に用ゐられたのである。三月伯林總罷工の際には、首都の一切の

新聞を數日間發行不能に陥らせた。斯の如き主義上の解放と實際上の壓制との矛盾は獨り伯林のみでなく、漢堡其他の各都市でも連續的に繰返へされたのである。バイエルンでは一九一九年二月二十一日、首相クルトアイスネルの暗殺後、政府は純社會政策の見地から政治新聞に對する檢閲を制定し、最大の平民新聞を強制し之を自家のために使用した。同年四月七日、バイエルン共和國の宣言は、一個月前に撤廢した新聞檢閲を再興し、且つ其施政の綱領中新聞企業の社會化と私的情報機關の除去とに向て峻嚴な措置を執るべき旨を載せたのである。是等の關係に於ても亦彼等は露西亞の手に倣つたもので、赤露の方では一九一七年十一月、其の國民議會の布告を以て、一切の通報公告の類は、その印刷、配附又は揭示までも悉く之を國家の獨占と定めた。然し勞農政府の機關としての地方勞働者兵士および農民議會の公報のみは印刷を許されたが其他一般時事の通報を目的とするものは全然禁止されたのである。ミュンヘン政府は全くこの古智を學んだものである。故に思ふ、新聞に對する制令が嚴酷である



時には、言論出版の自由の尊重といふことが最大の問題になるが、然し『ボルシェヴィズム』が行ひし如く、破壊が一切の経済的価値を無視する時には、此の最大問題の解決は此上もなく造作無く簡單なものであるといふことが判明する。そこで斯ういふ事が言ひ得られると思ふ、即ち新聞紙は何時にても、又如何なる國柄にても、全體の國民生活と何處までも緊密不可離の關係を有つものであると。

### 三 戦時に於ける歐米新聞の態度

英國の政策は二十世紀の初十年間は獨逸から遠かり、露佛に親善を求めた。之が世界戦争の運命を惹起した重大なる原因となつた。新聞紙の三國同盟なる適評の下された彼の倫敦の『タイムス』と巴里の『マタン』と露都の『ノーヴオエ、ヴレーミヤ』とは互に相結束した。『エドワード』七世は、その連衡政策の參謀總長に一新聞記者を任用した、それは彼の有名なA J 『ハームスウオース』後のノースクリップ卿で

彼れの目的は獨逸に對し國內の憎惡の激發と及び戦争の挑發とであつた。彼は所謂中立新聞の美名の下に、烈しい反獨的の働をした和蘭アムステルダム『テレグラフ』新聞と、大西洋彼岸の『紐育タイムス』とを連結して天才的新聞王としての活動を續けた。獨立自由の英國新聞、殊に有力なる『ウエストミンスター』、『デーリー』、『ニクス』及び『デーリー』、『クロニクル』の如きは、戦争の始めには往々中正の態度を維持して居たのであるが、『ルシタニヤ』號の轟沈以來完全なる轉回が始まり、此時期を畫して、英國新聞は一齊に統一的陣形を造るに至つたのである。夫は丁度事變の當初において、佛國新聞が取つたと同じやうな態度であつた。

佛蘭西に於いては、温厚な人望のあつたデュアン、ジョーレスの創立主宰した新聞『人<sup>リユミニテ</sup>道』は、戦争の愈よ始まるまでは非戦論を高唱して『マタン』と正反對の地位に立ち、烈しい筆陣を張つたのであるが、一朝ジョーレスが何者かの手で暗殺され其死ともに此の新聞も讀者を減じ、その勢力を減退するに至つた。又非伊國主義のギ



ユスターヴ、エルヴェの新聞『ラダールツシヤル社會戰』は、伊國が三國同盟を裏切つて聯合軍に味方するやうになると、忽ち『ラダールツシヤル勝利』と改稱して國家主義を標榜するに至つた。其狀恰もクレマンソウの新聞が、首領ク氏の政府に對する地位態度の如何によつて、時として『オシム、リイブ自由人』となり時として『オシム、アンシエネ鐵鎖の人』として現はるゝ如くであつた。然し彼等の獨逸に對する憎惡は、殆んど齊しく極限なしといふべき程度のものであつた。

伊太利へは佛國から既に永い歲月の前から、強い絲が引張られてあつた。羅馬の『メツサゼーロ』、ミラーノの『セコーロ』の如き新聞は、伊國政府の轉回には、實際少からず貢獻したものであつた。最大にして卓越したミラーノの新聞、『コルリエーレ』、デラ、セルラ』は、殊にガブリエーレ・ダモンツイオの意を承けて、伊國の態度を急轉直下せしめたのに頗る力があつた。又當時の外務大臣ソンニエーノの機關、『デオナーレ』、デターリア』と、『イデア』、ナツイオナーレ』及び改革社會主義の『ボボーロ』、デター

リア』とは、獨逸に對して戰爭を開始すべきか、將た三國同盟の誼を守るべきかに就いて、舉國大議論のあつた時に、戰爭反對論に對して暴威を振ひ而して終に之を強壓して了つたのである。

米國が戰爭に参加することゝなつた際まで、ハーストの新聞は『紐育アメリカン』でも、黄色紙の模本『イーヴニング、ジャーナル』でも稍や親獨的の立脚地を保持して居た、而してハースト系の通信社『インターナショナル、ニウス、サーヴイス』の如きも、英國海底電信の檢閲に對してその亂暴とその變造に對し赫怒しながら戦つて居た。然し一九一七年二月に於て、是等の新聞は忽ちにして悉く變節して了つた、而して其頃まで尙その存在を引延ばして居た米國所在の獨逸語新聞も、夫れと同時に重大なる犠牲の下に國民の反獨氣分の裡に葬られて了つたのである。

さて中立國の新聞は如何であつたか、戦時中獨逸は僅に三四の瑞西新聞と、東瑞西の獨語新聞とにのみ其の理解と同情とを見出したのであつた。然し西瑞西即ちシユネ



ーグや、ローザンヌでは、寧ろ獨逸に對する憎惡と害心とが熾んで其の調子は白耳義の亡命者新聞と更に見えるところが無かつた。

此の如く獨逸は新聞の天地に於ても當初から恐ろしい優勢な敵に取圍まれ、實に四面楚歌の状態に在つたのである、而して實戦の上と同じ様に此所にも人知れず甚しい苦戦が續いたのである。

#### 四 獨逸新聞界の概観

大規模なる現代新聞は其昔、言論出版の勝利が生んだ政治的分子の偏重から一轉して不偏不黨の非政治新聞に立歸つたのである。而して其の組織は地方的、商業的、若くは文學藝術的美文的な部分から成立つやうになつた。即ち現代新聞の重心は、政治以外の雜報、殊に『フイユトン』に存するのが普通の状態となつて來つた。

「フイユトン」Fenilletonとは佛國の新聞が多く第二の頁の下部に於て、輕文學及批評又は科學的記事に宛つ

るところのものを指し、更に是等の事項に關する論説をも含めて云ふ言葉。「アキンマン」Aho nemet 1月極購讀料とともに、歐洲大陸一般に通ずる佛蘭西起原の術語である。

然し此等の部分の嚴格なる品別は殆んど不可能のことである。何となれば經濟的問題と一部社會政策問題と相結び着き、政治的部分と商業的部分とが又相結び着き、而して自治政治問題は地方的部分と結び着き、藝術的政治は其れと一切の他の部分との限界を消失せしめるからである。從て報道部分と、論評部分との實際上の分離は頗る行はれ難いこととなり。社説は次第にその偏理的勢力を緩和して、直接事件の報道と結び付き、或は直ちに説明または批評的註釋の形式を取つて現はれるやうになつた。又『フイユトン』は、小説短篇の如き文學的作品に力を入れ、藝術科學及び文學的生活の總ての有意義な事象に對し批評的指導をなす任に當り、而して夫れに依つて押し廣めた較や低い水準、即ち閑時に見らるべき娛樂用のものから、品位ある新聞紙の高さ、即ち有意義な文化要素たる高さのところまで持ち行かうとして居るのである。



又商業的部分の重心は其爲換相場表と取引所相場表とにあるは言ふ迄も無いところである。近頃多くの新聞は、『スポウト』題目の上に、大なる價值を置くやうになつた。此れは獨逸ばかりではなく、英米は勿論佛澳伊などにも盛んに行はれて居る。恐らく世界一般の風潮であらう。今や『スポウト』たる英語は、歐洲各國を通じて通用する現代語となつて居る位である。

斯くして新聞の編輯は、廣い分業を必要となすに至つた。大新聞には幾多異つた方面の探訪者を有つて居る。又最近になつて最終版及び夜間版なるものが發達して來た。此れは眞の締切後に到着する新聞、及び記事の集結を作るものである。畢竟讀者の方から、變化の多い趣味の饒かなるべき日々の重要なる出來事を成るべく急速に見たい、而して夫れに散漫な一瞥を與へただけで直ちに了解が出来るやうにして欲しいとの希望に基くものである。此の最終版夜間版は、英米到るところで其模本を見出し得る事が出来る。唯だ獨逸には米國にある如きおせつかいな、吹聴的な低級な煽情的新

聞が無い。これは今のところ此國に侵入するの餘地甚だ乏しい様に見ゆる。

獨逸の大都市には、新聞の材料を集むる格段の機關が發生し夫れが幾重にも備はるやうになつた。之を統一するのが編輯の主要なる仕事である。即ち大抵の新聞種は一個所から同一の原稿で各新聞社に送付され、夫が外國からの電報電話の通信、議會の報告、および政黨的又は經濟的種々の組織からの發表にも適用されるのである。是等は毎日の新しい記録ではあるが、必ずしも正確完全な記録ではない。獨逸國內にある此種の通信社の數は約百五十、其内約一百は伯林にある。彼等の提供する材料が即ち新聞の元になるのである。是等の通信社は何れも、其發行する通信を始めから編輯素材として供給し廣く、政治、議會、國民經濟、外交地方的、フイユトンの、スポーツ的、學術的通信、會議の公表書および感傷的な裁判記事から、論說、短評、新刊批評、雜錄、謎等に至るまで、一切の用意をなして新聞に供給するのである。従つて新聞の編輯事務といふものは、唯だ是等の素材を取捨選擇して、鹽梅するだけに止まる



のである。斯の如く手廣く材料を供給する随分重要な此の機關も、英國や佛國では全然用ゐられてゐない。而して珍らしい事には、佛國では新聞同志が相互に剽竊を行るのである。獨逸では新聞制の分權が驚くべく發達して居て、殊に地方の新聞は、成るべく賣價を低廉にする必要上此の通信機關に依頼すること頗る多い。而して彼等は此の通信社と都會の大新聞と其他の何れかの中央機關から、其の鉛版や銅版に組込む材料までをも得るのである。若し此れが發展にして其頂點に達すれば、頭腦の無い新聞の大系統が成立することになる。

電報通信業の最大なるものが歐洲に三社ある。英國の『ロイター』佛蘭西の『ハヴァス』、獨逸の『ヴォルフ』、此の三社は何れも一八五〇年前後に創立されたものである。其の起原及び歴史等は茲に省略する。彼等は戦前一つの『カールテル』取極めを拵へて居た。夫れは先づ世界を三分して、營業上の排他主義を重んじたのである、即ち一社は他社の營業範圍内に於ては、申合せ二社以外の者には夫れが新聞社であらう

が、同業者であらうが、何れにも其材料を遣らないといふのである。斯の如く其區分は明瞭であつたが、其後、維納に電報通信局、オレグラフ、エンコルレスボンデンツ、ビュロウ羅馬にアゼンチーナ、ステフハーニ、聖ペテルスブルグに電信通信社、コーペンハーゲンに『リツツアウ社』ビュロウといふやうに、各地にその國民的通信社が出来、夫等の事業がみな其緒に就くやうになつても三社取極めの原則は實質的に殘存して少しも其の區分が變らなかつた。斯くて『ロイター』は大英國と東亞細亞、『ハヴァス』は新拉丁語系の諸國、而して南米は『ロイター』、『ハヴァス』兩社共同、『ヴォルフ』は獨逸帝國その殖民地および北部並に東部の歐洲各國に活動すべく定められて居たのである。英國海底線の數と其延長とは、此の世界的帝國の鵬翼の如くに『ロイター』が決定的優越を持して居るのは當然のことである。然し此の關係は之を受くる國の態度如何に依て任意にその勢威から脱することが出来る。即ち正しい判断を以て之れに臨み、爲にする散布的通信や『プロバガンダ』などを鑑別取捨する權利は、それを受くる方に有つて居るからである。現に『ヴォルフ



「フ」社の如きは、倫敦巴里、「ブラッセル」、維納、羅馬、君府、紐育、其他に、毫も外國の掣肘を受けない代表者を派遣して、外國通信社に誤られないことを期して居る。「ハヴァス」社勿論然りである。

海外通信に就ては、米國の二大通信社、即ち「アツソーシエテッド、プレス」と「ユーナイテッド、プレス」とを最後に擧げねばならぬ。前者は朝刊新聞に重きをなし、後者は夕刊新聞を支配する。此の兩社ともに其營業上の利益は、加盟新聞社に割戻すのである。

## 五 販賣法と經濟と廣告

新聞紙を遠方の讀者に配達するには、郵税を要し手数を要し自然代價が高くなる。市内に配達するにも、較や面倒が伴ふから。其の面倒や手数が掛かるだけ、新聞社に取つては利益が少くなる。獨逸で一番多數なのは、月極購讀アボソクマンで次は都市の街上や停車

場などに於ける一枚賣りである。此れは相當に賣れ近來侮ることの出来ないものになつた。從來獨逸の新聞は此の一枚賣り無しで彼れ程の發達をしたのである、然し佛、英、米の諸國は、寧ろ其反對で月極購讀を割合に有意義のものとして居無い。斯る状態であるから、獨逸では新聞を賣る移動する辻店カメルット Camelot は、巴里や其他の都市ほどこに發達して居ない。然し巴里や、倫敦紐育の街上では、一日中のある一定時間、俗にいふ込み合時間の前後などには、新聞舗の店頭は實に異常なる光景を呈するのである。戰爭中は獨逸でも此の街上賣りが頗る意義あるものであつた。

新聞の發行部數を外部から知らうとしても、夫れは各社の營業上の秘密として、容易に窺知することの出来ない様になつてゐる。此れは主として廣告の依頼に大關係を有するからである。戰時中、軍事當局者の調査した所に據ると、獨逸全國の新聞は三千二百七十六あつて、此の半數の約千六百が日刊新聞であつた。而して此のうち、朝刊以外に夕刊と晝刊とを併せて發行するものが百二十、又政黨の色別けから云へば、



即ち半數の千六百二十が不偏不黨の部に入るべきもので、社會黨に屬するものが八十六、他の千五百七十は悉く種々の政黨政派に關係あるものであつた。此の發行部數を大別すると次の如くなる。

|      |       |
|------|-------|
| 千以下  | 四二五   |
| 五千以下 | 一、七七一 |
| 一萬以下 | 五三六   |
| 五萬以下 | 四四三   |
| 五萬以上 | 一〇一   |

計三、二七六

以上は概算で其精密なる數字は知る事が出来ない、夫は讀者の常に移動勝ちなる各社が商業上の秘密として嚴に外部に知られない様に方法を講じて居るからである。然し各種の方面から得た材料から觀測すれば獨逸國中最高の刷り高は、『ベルリーナー

モルゲンポスト』で之は四十萬以上、次は『ベルリーナー、ターゲブラット』の三十萬、『ベルリーナー・フォルクス、ツァイツング』の約二十七萬、『ベルリーナー・ロカールアンツァイガー』と、『ライプツィゲル・ノイエステン・ナツハリヒテン』とが各約二十萬、而して十萬と二十萬との間にあるものには社會民主黨の機關『フォルクウェルツ』以下各地方の主なる新聞がある。然し其の發行部數も前記の理由で甚だ不明確であるが、種々の方法から大體當らずも雖も遠からざる計算が出来る。一九一六年のグラーグナーの計算に據ると獨逸新聞の一日の總刷出高は二千二百萬部とされて居る。即ち約人口の三分の一に當るのである。

獨逸でも新聞事業の最初は純然たる營業上の利害關係から來たものである。當時は探訪も可なり活潑で、新聞種の蒐集には餘り經費を要せず一般に新聞事業は償つて居たものと見ゆる。夫は十八世紀に於ける伯林新聞業の歴史を見ると、其當時新聞發行特許權が巨額の金錢價で代表されてゐた事實で分かる。其頃既に政治問題は政府の峻嚴



なる検閲に依つて抑壓されて居たから、自然新聞は單なる時事を報道するものとなつて居た。然るに十九世紀の中ばに起つた政治上の大變動は新聞の性質を一變させて、新聞を賣る事から、新聞所有主の政治思想を發表するのを主眼とする様に變つて行つた。政黨と調子を合せ、政派のために犠牲を獻げた其の骨折に對し、新聞は其の報償を要求する、夫れは正當な働に對する要求である。然るに彼等は十分に夫れを與へられて居ない。『アルゲマイネ・ツァイツング』の出資者の談話に依ると、同紙を所有して居れば此先十年間に少くも尙ほ百萬馬克を要することは確實である、内實自己の目的に用ひ外面だけ政黨を代表する如きやり方は昔の方法で、今後の新聞は何處までも純商賣的企業をして營業せねば立ち行かぬといふ。此の新聞は近年フウゴ・スチンネスが其の新聞界に活躍する手始めに先づ其掌中に入れたものである。

最近獨逸の新聞もその經營上の必要から次第に純企業の方針を執るやうになり、或は安價な通俗的な、而して政治を標榜しない新聞を發刊して、其の品位ある姉妹新聞

を補助扶養するものを生ずるに至つた。之れは状態の物質的困難から脱出する最上にして且つ非難の少い逃げ路である。地方の政治的小新聞は、此點では稍や樂である。彼等は僅少の廣告收入によつて立つて行くのである。然し概して云へば現代新聞は、新聞を賣るのでもなく、政見を指導するのでも無く、唯主として廣告に依て成立ち從て漸次之に支配されるやうになつて來た。ライブツイツヒの國民經濟學者カール、ピールヘルは、前世紀の後半に行はれた特殊な且つ深刻な新聞界の變化を考察して斯う言つた。以前は新聞はその讀者に新報道を賣つたのであつたが。今は新聞が私的利<sup>プロフィット</sup>害<sup>ハザード</sup>や營利を目的とする人々に其の讀者の集團を賣るのであると、實際現代の大新聞は、最早月極購讀料のみでは決して立ち行かない。其の讀者圈の擴張は、その目的であり得ない。夫れをなすには年が年中輕からぬ贈物を讀者に贈呈することになり、又斯くして得たる新讀者も、全くの損害を意味するやうになつた程左様に、多くの經費を要するやうになつて來た。然し讀者の増加は寧ろ間接の利益にはなる。即ち發行部數



の増加は、新聞の地位を高め延いて廣告料の増收となり得るのである。

先年『ミュンヘン・ノイエステン・ナッハリヒテン』の五十年記念の時、其の社主の公表した所に據ると、同紙の編輯其他一切の機關の日々の經營費用は、七千四百馬克以上である。之に對し月極及び一枚賣りの収入が當時の刷出高九萬五千部の計算で二千六百餘馬克である。これでは實に新聞元價の僅に三分の一に當るのみである。故に其の不足する三分の二と、事業上擧げねばならぬ利益金とは、全部廣告費から收得せねばならぬと。維納の『ノイエ・フライエ・ブレッツセ』の如きは、其の購讀料金割合に高く、毎三ヶ月十八『グルデン』であるが、原價のみで三十『グルデン』に相當して居ると云ふ。又彼の有名な倫敦『タイムズ』にしても一部三片の賣價を其全刷出高に乗すると、それは僅に其廣告收入の二分の一に當るに過ぎない、此の兩方からの収入を合算して、辛うじて原價を償ふのであるといふ。

新聞の現状が斯様に發展して來たのと同時に、新聞發行者の利害と、編輯當局者の

利害とが益離隔して行くのは誠に已むを得ない成行である。然し結局は後者の利害は、常に第二位で從屬的のものであり、而して唯だ前者の利益と一致する時、又は一致する間のみ協調を保ち得るのである。斯くて兩者の間常に不斷の戦ひあるべきは何人にも想像が出来る。

## 六 記者と其教養—對—社會

新聞記者と社會との關係、即ち社會に於ける記者の位置は各國若干の相違がある。英米兩國または他の共和國の如く、一切の公けの權力が容易に國民の意志で左右される國、非官僚主義の國、新聞と實際政治との間に人格的連繫があるところの國、殆んど各の新聞社を率ゆる政治記者が代議士であるところの國、今日は記者、明日は卿相その卿相も明後日は再び元の記者といふが如きを例とする國個様の國々では新聞記者は決して輕蔑を以て遇せられる筈は無い。従つて、彼等は何處までも其の政治生活を



續けねばならず、又續けて行くことが出来るのである。夫れは米國に於て殊に然りである。獨逸に於ては、一切の免許資格を要する職業者は悉く一定の試験を経て、官の認可を得ねばならぬ。從て此國の新聞記者は、此點から甚だ重んぜられて居らぬ。のみならず彼等は官憲の不信的嫌忌の下に、又其の教育程度と、其の職業の經濟的地位の上に現はるる社會的輕侮の下に、而して又他の文學者や殊に學者社會の側からの故意的疎隔の下に抗戦しながら苦んで居るのである。

新聞業はエンタテインメント脱線家の避難的職業であるといふのは或は當れる言かも知れぬ。又今日でも地方の小新聞には、往々にしてその教養の點から云つても、其の智性その道徳性の點から云つても、眞に輿論を代表する人々なりと許すことの出来ぬ如き人物も居る。然し大新聞の記者中には、現に其幹部に『ドクトル』の稱號を有た者も、また國定試験を経た、立派な大學卒業者も居る。而して其の職業に對して、卓絶した天分の力を、徐々に素直に働かせて、『大學教育は自己一人を幸福にする力なり』との信條に向

つて其生きた辯駁として、努力を惜まらず勉強して居る人々もある。新聞記者は造らるるのでなく、生れるのであるとは能く繰り返へさるゝ言であるが、新聞界で有意義な働をなす者は必ず天稟または天才を豫想に置かねばならぬ。學校教育の如き決して完全之れが缺陷を補ひ得るものには無い。斯く考へ來れば、新聞記者の地位の一般的高上と職業的記者を養成する事の上から、是非とも必要な其經濟的保證の問題が起つて來るのである。而して又特別に記者養成を目的とする、大學を必要とする議論に就ても、容易に賛成を得ることが出来るのである。

最近十年間、國內の趨勢は多くの點において、此の提論を支持するやうになつて來た。されば古い大學も覺醒して學科の創設やその改造を斷行して時勢の必要に應ずるやうになつた。其の史學科の中でも、從來の煩瑣哲學流の學風を改めて、實際政治的、實際史學的現代精神を夫れに加味するやうになつた。由來獨逸では、實際經濟學者及び其の研究者の新職業として其の目標としたところは主として商工業、農業、即ち實業



界の書記、書記長、及び役員たるにあつた。夫れは事實上にも抽象的にも、甚しく新聞記者の夫れに接近した職業であつて、其深い所は國民經濟及び社會的政治の問題の後方に久しく斥けられてゐた大きい政治學の範圍に這入り政治談を實演するものである。故に新聞記者の職業は、これら實際政治學者の行き場所であるのである。其所で屢々中學卒業者の志望標目の中に、新聞記者の語を見出し、また大學生の研究科目中に、新聞學を選ぶ者を生じたのである。然し、大學殊に私學でも、新聞業新聞學をその講義表に上すことは、毎度物議の種となり、様々の妨害に出遭つたのであるが、『ハイデルベルヒ』、『ダンツィツヒ』、『ライプツィツヒ』、其他の諸大學では、既に其荆棘を開き有力なる斯道の博士も出て居る位である。獨逸以外では、瑞西の『ベルン』大學、米國の『ウイスコンシン』大學、紐育『コロンビヤ』大學など其の新聞科は殊に有名である。最近伯林に高等新聞學校が、私人側の發企で創立されたが、就學者可なり多く將來甚だ有望のやうである。

新聞記者たる職責の實行に效果あるは其の精神の確固、普遍的注意、趣味の多方面、又ウヰットの異常に豊富なる事殊に善良なる記憶を擧げねばならぬ。新聞記者に取ては汗牛充棟の参考書の一切も、大思想や深刻なる知識もそれらは彼が常に事に當つて持ち合はせて居る平易な常識に代り得るものでない。記者は日々に生起する事物に對し咄嗟に其知識を夫れへ向け、夫れを捉へ、夫れを理解し、夫れを説明し、夫れを選別し、而して夫れに手を入れねばならぬ。故に新聞記者は事件に出會つて迅速に精確なる意見を立て得る特殊の才能と、及び積極的に詳密なる叙述を作し得る天分とを持たねばならぬ。彼は是等の力に依つて其の記述の印象を輕捷活潑ならしめ斯くして讀者の興味を最初から十分に引着け得るのである。

以上の技能は、學校や學問から得らるべきものでないことは、言ふ迄もなく明かな事である。然し是等の格段なる記者の特性が、其職業の特殊なる要求に應じつゝ不斷に確實なる教養の各種を形づくり而してそれが漸次完成さるゝことは、他くまで必要な



事柄である。法律學者、經濟學者、史學者、哲學者、言語學者、自然科學者、技術家官吏、商人、教師、總て是等の人々は記者として、最高の要求を充たし得るのである。世人は新聞記者を屢ば非難するのは事實彼等は總ての事について何かを理解するが、何物をも正當に理解して居ないといふ事である。之は決して不當な非難では無い。新聞記者を教育する大學を創設する企圖の已むを得ざる理由も茲に在る。記者たる資格には如何なる問題にも、如何なる場合にも、瞬間に之に應じ得る博通の萬有學者でも不可であり、又萬象アンレクツニヤトフハフハニ専門家でも宜しくない。何となれば何事をも正當に知つて居ない人に限り、一切を知つて居ると自信して居るからである。然らば記者たるべき基礎的教育の眞價何れにありやと云へば、それは假令或る局限された範圍内の事でも、學理的調査の方法によつて眞面目なる研究を尊重する風を學び、又特殊な變つた事柄に接しても常識的矩規を、直ちに夫れに宛て締め得る人で無くてはならぬ。而して最も大切な事は、良心が常に働く高尚なる品性を備ふる事である。

## 七 社會心理の要素としての新聞紙

新聞が強大なる飛躍を始めたのは、文化が集團文化マツセンクナルフイナルとなり始めた時からで、此時から新聞は時代の此特質と最も緊密な關係を有つ様になつた。此のあひだに所謂第三階級は自分自らを解放し、而して政治上經濟上の勢力及び教化の有力なる支持者となつたのである。之が爲め第四階級は益壓迫され、竟に饑餓に驅られて權力、所有、享樂、教化の各方面に向つて、何物かを奪取すべく推し進んで行つた。而して直ちに自分等の新聞を造ることが其經濟的奮闘、其政治的努力に對する生死の問題であり、且つ民衆に對する『ブルジョア』新聞の勢力が、彼等の奮闘努力の果實に反對する最大の障害物であると觀たのである。依て彼等は先づ民衆の耳を捉へるべく、其敵に向つて活潑な競争を開始し力を之に注ぐやうになつたのである。斯くして年々、より廣い人民階級の政治的權力を増大し、其生活状態を高め、教育を一般的ならしめ、夫れに



よつて生活問題の種々に對して理論的興味を發生させたのである。斯かる時代の文化の特質として、其處に夥多の共鳴し難い事件や状態を發生させた。夫れは過渡時代未成品時代の現象と見て暫く寛假するとしても、若し新聞が益民衆に媚び、終に民衆の脚下に拜跪するに至れば此の世界は如何なる状を呈するであらうか。思ふにその曉には政治は其大を失ひ、學問は其尊貴を失ひ、藝術は其高尚を失ひ、貨幣は眞に賤しむべきものとなり。其の終極の結果は果して多衆人民に以前に増したる幸福を與へ得るであらうか。又若し新聞にして主として第四階級の味方となるに至らば、茲に飽食して居る者と、饑餓に苦んで居る者との間の反目は更に一層の險惡を加へ、世は擧げて此の攻撃と防禦とに忙殺さるゝに至るであらう。然し斯ういふ時勢は新聞の最も儲かる時代であるから、若しも新聞が其勢に乗じて以て其活動範圍を擴むるため、車仕掛けに無二無三に、ひたすら前方に向つて進み行くならば、竟に如何なる事態を惹起すであらうか。新聞及び新聞記者の良心の活動を要することの最も切實なるは、此際に在る。

然し乍ら、到底新聞は民衆の爲めに生き、又民衆に依つて生くるものに外ならぬ。故に或る特別の人格であつても、新聞に據つて其の眼前の大小社會に向ひ、恰も牧師が講壇で説教するかの如き態度を取るならば、其の新聞は人々の顧るところとならず忽ち排斥されて了ふのである。従て是の如き愚擧を敢てする新聞は、現今殆んど無くなつた。元來新聞は、非人格的のもので、其の所有主と、記者と、寄書家とが互に相協調して、何かの意見を代表することもあるが、要するに其の精神は、寧ろ月極購讀者及び不定の讀者團の意見を代表するものである、故に新聞自身の斯くもあらんと推定した讀者達の意見と意向とが、新聞其物の上に、大なる勢力を及ぼすのである。固より此れは今日に始まつた事ではないが、現代の新聞は、此の讀者團體を常に益擴大せんとして、此の推定的讀者の意見、意向の宣傳を只管に努むるのである。新聞は其根本に於ても、又事實に於ても、常に新しいものゝ上に依頼する。そこで、世間の多數人は彼等の輿論を代表することを新聞紙に要求し、民衆の機關、民衆の喇叭たら



んことを要むると同時に、先づ民衆を覺醒し、創造し、且つ指導せんことを要求する。蓋し新聞事業が最上階級の職業であり、且つ至大の意義を有する事業だといふ議論も畢竟は是邊に基くのである。新聞は公衆に依つて立ち公衆は新聞に依つて立つ、此の強力なる交互作用のなかに、大いなる精神的尊貴と特質とを備へた新聞は、常に新しい思想と、新しい眞理とを生み、且つ孕みつゝ、シルレルの言つた、最高意義に於ける道徳的事業たるべく向上の一路を辿り得るのである。

然し實際になると、随分その状態が違ふ。獨逸でも英佛でも、叙上の榮冠を献ぐるに足る新聞紙は絶えて無い。而かも新聞事業の絶對自由のある時には、夫が時として過渡時代の特徴として、無主義、無理想、無定見の状態を呈し、只管『估らん哉』の態度を取り、その思想を賣り、またその立脚地をも賣るに至るのである。斯くて此の無主義の立場から、一般讀者と有力なる保護者、而して廣告者の意に副はざる如き事項は、成るべく新聞に掲載せないことになるのである。若し誤て之を掲載するときは、

次の版で之に修正を加へるか、又は巧妙なる取消し記事を載せるのである。之が所謂不偏不黨新聞の本領である。故に此等の社會に這入ると、一定の主義を奉じ惠まれた眞理の所有を信する人々でも、遂には公衆の上機嫌を博すべく、之に媚びる事をも敢て恥としない様に習慣附けられて了ふのである。殊に地方の小新聞では、此弊が一層甚しい。都鄙を通じて、高い教養ある讀者でも、その物質的利害關係の狭い問題が善き動機で、趣味深く發表されたとき、夫れが自分に反對の意見であつても、之を尊重しやうといふ様な人は甚だ少ない。此れは丁度、流れに逆つて泳ぎ續ける勇氣を持つ品性の高い新聞の少い程に少いものである。

新聞は斯うして多數民衆に屈從して居る。而も他の一方では所謂教育ある階級のうちへ、機會ある毎に、多衆の意を迎ふべく企圖した其の意見や、批評や、希望や好悪や、喜怒哀樂やを暗示し、又た強要するのである。而して夫れが政治經濟の問題は勿論、藝術の問題にまでも及ぶのである。印刷された言辭に對する尊敬の過大なるは、



眞に嘆すべく、恐るべく、又恥づべき事である。假令へ教育の高い人々でも、毎朝新聞を讀んで、一つの事件を考へるとき、之に對する適當な判断は、急速に形成し得るものでない。既に新聞によりてそれが暗示する判断に囚はれたる以上、自ら容易に善き判断を出すことは出来ぬ。斯くて新聞の讀者は、自ら日々の事件を靜かに考慮する念を喪失するやうになる。之を善い事にして、新聞紙はその商賣上の目的を達するため、思ひ切り粗野な、卑俗な、而して民衆の本能に媚びるやうな書振りで、民衆の心を唆るのである。然うすると民衆はその記事により驕ることの反對に、一層自立の心を喪失する。斯くて一つの主張が、印刷された言辭の十分の權威をもつて、日々進出し來れば、民衆はこれを見て、一種の心理作用を起し、終には其事柄が眞理でなければならぬと思ふやうな心持ちになるのである。自立の心を失つた者は、又た不精にもなり易い。彼等は毎日自己の説を自己で考へるよりも、新聞に書いた意見や記事の通りに従ふべく心構をして、夫に従ひ事へた方が餘程氣樂であるといふ心にもなる。新

聞と民衆との斯かる關係は、要するに相互の自己壓迫とも評すべきものであらう。

人は自己の善い方面の發表について喜ぶ如く、悪い方面の發表に就いて新聞を恐れる。英國に於ては其の私的生活のために他を誹謗譏諷することに對して、強い制裁がある。是等は刑罰的威赫と、峻嚴なる裁判沙汰とで防禦されて居る。——彼の『タイムス』も有名な『バーネル』事件で、十萬磅の金刑に處せられた。——残念ながら獨逸に於ては、人は名譽に對して左様に利き目ある法律上の保護を受けて居ない。故に一般に新聞の調子が、立派と稱し得られないところがあつて、屢次個人の名譽に對して、侮蔑や凌辱を加へる、其の結果として多くの後暗い輩も、様でない人々も、新聞の沈黙と、沈黙以上のものを要求するやうになる。而して少數の惡徳新聞は、之に乗じて一の合法的營業を始むるに至るのである。然かし此種の惡徳新聞や、中傷新聞のことに就ては、私は今多くを茲に語ることを好まない。

新聞は世間一切の事象を誤解しないやう、又た非認しないやう、凡百の事象を唯有



りのまゝに曝け出すと云ふことになる、勢い讀者を其感情によつて煽動し、之を鎖に繋ぎ、之に桎梏を掛け置くといふ想定的必要を生じ、之が爲め屢ば道德的に考察し且つ殊に青年教育の見地から見て、極めて喜ばしからざる彼の刺戟的材料や、忌はしき裁判事件の登載を多くし、青年をして斯る事件に對する、偏愛を誘起せしむることとなり、其の結果は、新聞の雜報欄を、此種の不純な供給と需要とで充滿させるやうになる。新聞をして斯の如き罪を犯させるやうな破目に行き詰まらすことに關しては國家の壓迫は、新聞發行者の禮儀の感情に一層より力強く援助すべき筈である。此一事に就ては眞面目なる人々の間に、意見の相違あるべきを疑はぬ。従つて茲に斯ういふ根本的の疑問が起つて來る。即ち新聞は多衆政治の機關であるか、多衆本能の機關であるか、輿論の指揮者また其の從僕をもつて任ずる人間を教育する偉大なる機關であるか、又或は衆民を愚にする道具であるか、彼等に益を與ふるものか、將た彼等に取て有害無益のものであるか。新聞は人類全體を上に高め、これを向上させるもので

あるか、或は之を下に低くめ、墮落に陥し入るゝものであるか。又果して人類文化の發展を進めるものであるか、或は然らずして、之を誤れる癒やすべからざる途に導くものであるか。以上の疑問は現在また將來の文化問題及び社會問題の、最も主要なる部分でなくて何であらう。

これらの疑問に對する確然たる答解は、無論實驗的方法では發見し得ないのである。畢竟夫れはもつと廣いところの、世界觀問題でなければならぬ。思ふに我等獨逸の國民精神は、その特質として一般に新聞の特性を輕視し、夫れをその本來の目的に利用すべく、餘りに等閑視し過ぎた憾みがある。精神的貴族らは常に良心からの厭忌を以て、新聞に對するであらうし、又對せばならぬ。夫れは彼等に取つては、新聞は『デモクラシー』其物の正體であるからである。其所で我等は竟に次のやうな疑問に到着する。民衆なるものは愚昧の中に禍害を起すもの、而して何物かに隸屬して、初めて物の實態を感知し之を捕捉するが、然し其身邊の近いところに、一切のものを穢



し且つ醜くする手を有つた『美の敵』なるものゝあるを理解しない如き、粗野蒙昧なる賤民或は暗黒中の盲目神の様なものだとして之を見るべきか。將た又其の醜醉する奥深いところから、將來の種屬が徐々に且つ確實に引き出さるゝ如くに、國民の大精神が引擧げられるべき、立派なる國民全體フォルクスガングとして、彼等を尊敬すべきか如何んといふ最後のところに來た。

現代新聞の傾向は、獨逸に在ては現に革命以前から、其の狐疑逡巡の態度を決定し『デモクラシー』への道へと自ら動いて行つた。教育の普及、政權の分與、物質的幸福の増進、清ギき高尚なる歡樂の習熟から來る民衆の高上、是等は十九世紀の轉回時代において、新聞が自らその憑據となした警語であつた。斯かる上は、新聞は自重し、また其の同胞國民を蔑視しないで、寧ろ彼等の善い方面を搜し、その善い方面からして新聞事業に勇氣と悦喜とを自ら創造して行き、新聞自ら新聞の意義を、絶えず、より廣く、より高く昂上させて行かねばならぬ。而して又我々は、我々國民の眞實の先導

者たる任を心置きなく新聞に委ねばならぬ。要は世道人心の將來を思ふものは必ず新聞のことを忠實に親切に考へねばならぬと思ふ。或人曰く使從『パウロ』が今日生きて居たならば、屹度新聞を發行して居たであらう。『ルーテル』も確かに其の一人であつたに相違ないと、私も亦之に同感を表する一人である。

## 八 政治生活及び政治に於ける新聞紙

現代に於て新聞の意義の重要さは、如何なる讃辭を並べても過重となる恐れはない。新聞紙は現今の社會においては、電氣の必要なる如く絶對的に必要である。否な新聞紙は、今日の公的及び個人的生活の形成のためには、電氣よりも尙ほ、より多く特性的であり且つより多く切要なるものであると思ふ。

英國議會は、英國が大規模に政治的公開を行ふやうになつた以前にも存在して居て相當に強い權力をも示して居たのであるが、斯かる代議政治にも、或る特權を附與さ



れたところの貴族的分子が入込んで来てから、後は、代議政治の眞實の生存要素が、議會でのその討議及その決議の公開に在る様になつた。之がため現時に於ては、眞の政治は唯だ一に新聞記事に依頼する外無きことになつた。其結果若し一步を誤るならば、一九〇六年、獨逸議會に於ける偶發事件として起つた例の如く、憲法上の權能を廣義に解釋して、新聞に極度の壓迫を加へ、其極議會をして、精神政治的要素としての國民代表たる實を、消失せしめて了ふ事にもなり得る。

今日の代議政治は、新聞紙上において政府の施政に對する其の裁判を公にする事である。此れと丁度同じ程度において、今日の外交は、その組織、その活動の形式だけは、前世紀から踏襲して來た儘で、彼等の本來の仕事の大部分は、今や新聞に譲つて了ひ只小事件のみを當事者自分で取扱ふやうになつて來た。而して其小事件でも唯新聞の助けに依つてのみ、自ら解決し得るといふまでになつた。今日の外交官は、政治上の機密や、新事件などを、最早や盛裝した佳人や、買収された待從官などから聞く

ことをしないで、寧ろ大新聞の報道に因つて夫れを知るのである。大新聞には全然夫等の人々とは異つた立派な情報機關が具はつてゐて、組織立つた諜報を集め、最善の調査を遂げて、その任務を果し、而して自らを重要な權力要素たらしめる。斯の如き状態から、新聞の活動が對外政治の範圍にまで立入るのは、當然の事態である。されば日々の政治論を載せた紙の恐ろしい大數は、國の内外に散布され、救ふべからざる危機を造つた例も甚だ少くない。讀者は無頓着で居るが新聞は興味を唆ることの出來るやうな事件を、成るだけ新しい方面に求めて、終に之を外國關係の方面に得たのである。而して此所は抵抗の最も少い方面であるから、露骨誇大の言説、もしくは鋭利苛刻なる議論に趨る傾向が自ら生ずるのである。獨英兩國の關係を切迫させ、終に這回の大戦を惹起せしめたのも、其の根本に溯れば、それは悉く新聞の仕業であつたのである。

英國といふ國は新聞といふ紙の足で立つて居る。然かも確乎として此の紙の足の上



に立つて居る。其の尨大なる天地は、不十分な國法的基礎や、軍事上の防禦方略の上に安泰であるよりも、遙に多く同種の民族の整調一致の事實において安泰である。此れは主として聯合王國內に於ても、各殖民地に於ても、王國合一主義の思想に熱心で且つ強烈に努力した帝國主義的新聞紙の働きに外ならない。『アングロー、サクソン』の世界を結び付け、一旦時機が來れば、政治的議論の相違や、利害の背反は互に一切打捨て、一層鞏固な『文化結合』として共に結合する強い紐を、創造しやうといふのが、英國新聞記者の一致した持論である。吾人は米國に行くと、屢ば『米國語を話しますか』と訊かれることがある。然し紐育、華盛頓、聖路易、桑港など到る所で語り、且つ書くところの語は、倫敦やマンチエスターで話すと同一の英語である。英米雙方の國民は、互に直下に了解し、疑はしい通譯の仲介なしに、毎日その國民の思想や感情の奥底を、遺憾なく交換し得るといふ事實は、兩國『アンタント』の賛同者に、此上もなく強い味方となるものである。

この結果は何所に到着したか。夫れは英國と獨逸との間の關係が、數十年このかた政治思想及び通信交換の不満足なる状態のもとに、竟に慘憺たる大破裂の方へ導いて行つた事實が、何よりも明かに之れを證明するのである。若し一二週間くらゐ、米國に在つて、英語で書かれた新聞を點檢し、之を研究するならば、彼等が獨逸の形勢につき、獨逸の出來事につき、其特性的で且つ報道に價值ありと見たものが、其如何なる種類のものであるかが判り、驚きと恐れを禁じ得ないであらう。米國新聞を通して獨逸を見る人は、獨逸の公的生活は、宮廷内の陰謀や、醜聞譚から成立つて居るかの如く解釋するものも之が爲めである。而して又眞面目なる米國人の眼には、獨逸の新聞は單に米國の政治的腐敗、資本主義の飽くなき横暴、自稱十億長者の亂心に類せる享樂等に就いてより外、何物をも報道して居ないといふ事を感じざるであらう。

之を考へると、獨逸の文化結合のためには、外國に於て獨逸語で書かれた新聞が、最高意義に於ける一要素となることが明かになる。夫れは正に獨逸國の版圖の外に閉



されて居る、獨逸の領地でもあり、又た我等の國民結合のバラ／＼にされた手足でもある。然し茲に注意しなければならぬ一事は、新聞は文化連絡の支持者であると同時に、又その破壊者であるといふことである。新聞が概して其の無關心なる振舞によつて、他を誤る如く、其の偏頗なる精神によつて、人を害ふことの甚だ多きを知らねばならぬ。

新聞の勢力を知つて、之を自家の用に供せしめんとしたものに、古い時代では羅馬のシーザーあり、近き處ではフリードリヒ大王があつた。近代の英雄ナポレオンも、十萬の敵兵よりも、四個の敵對新聞がより多くの害をなすとの持説を變へなかつた。一時彼は思ひ切つた手段を取つて、自由新聞を悉く壓迫し、之を存分に蹂躪して、竟にその發行を禁止し僅に巴里に四個、各縣に一個づゝの從屬新聞を許すことにした。鐵血宰相ビスマークが、その一生の大事業であつた聯邦建設といふ新政策のため如何に焦慮苦心したかは、當時一般に知れ渡つてゐた事であつて、今尙ほ人の記憶に新た

なるところである。彼は曾て自ら新聞を創立し、或ひは必要に際し國內の新聞紙に一の通牒を發してその方向の轉回を嚴令したことも屢ばであつた。而して獨逸帝國建設の偉業成るとともに、新聞をもつて彼れ獨自一己の政治的手段に供用した。即ち彼は有名なる『寒流政策』により、彼に降參して來た新聞を、直接歐洲の政治に關與させた。斯くて彼は時勢の變化を洞察して、自國の新聞に外交上の機能の一部を負はせたのである。彼は其の失脚後も、尙ほ新聞とは決して絶縁しなかつた。彼は實に新聞を最もよく利用した一人である。

各國政府と、多くの中央官廳とは、今日もなほ公報とか、官報とか稱するものを持つて居る。然し之は本來新聞と稱し得べきものでなく、従つて本書には關係の薄いものであるが、此外に一般に半官報と稱するものがある。之は純然たる私的企業であつて、官廳と不斷の接觸を保ち、其所から日々の事件や問題についての正確な報道を受けるのであるから。これらの關係において、政府の政治的態度に對しては大に慎重の



態度を執るのを常とする。然し國に依り新聞によりて、此の範疇の中に自ら種々色彩の濃淡がある。彼等の或者は、その政治的立場が夫れを許す間、官邊とともに一緒に歩み、或者は政府と協調を保つ間のみ、官邊との關係を注意するのである。さり乍ら新聞としては、政府筋と協調妥協の有無の如何に拘らず、彼等と和解しがたい險しい反目のあらざる以上、決して政府筋から出る新聞種を等閑視する譯にはゆかぬ。何となれば重要な政治上の新聞種の大部分は常に官邊が其第一の源泉であるのと、又官邊の時々々の立場を知ることが、全然獨立した新聞に取つても非常に大切な事であるからである。若し新聞が獨立新聞の風を装ひながら、其國の政府の政治上の立場に背反して自ら欺き、外部の國の利益を辯護するならば、夫れは言ふ迄もなく國家全體の恥辱である。此種の新聞は、人之を憎んで爬行動物新聞レツチアエニプレツケ(又は蛇蝎新聞)と稱する。若し夫れが人の信ずる如く、外國の資本から補助を得て居るならば、人は之を蛇蝎資金といふのである。

上來說き來つた如き新聞と政治との關係は、獨逸では既に過去の事實となつて了つた。這回の歐洲戰爭中に於ける新聞の自由束縛、之に代る官邊材料の壓到に就ては、既に前に論述した通りである。而して又最近革命の際に於て、それが新聞紙上に齎した影響は、不幸にも全然それと揆を一にしたのである。未來は何を將來するであらうか。若しも政治機關が益自由を尊重するやうになれば、新聞の仕事は益重大となり、其の責任の愈々倍々重大を加ふることだけは確かである。

## 九 實業生活と新聞紙

新聞が政治に關係の深いこととは言ふ迄もないが、實業生活も亦た新聞の機能に依頼すること頗る多い。第一に株式會社の如きは、其の形式上、新聞紙無しには考へることが出来ない。其の如く外國市場の變動や、世界經濟の大連鎖を勘定に入れねばならぬところの實業家に取つては、新聞は物質的に絶対必要のものである。夫は單に外國